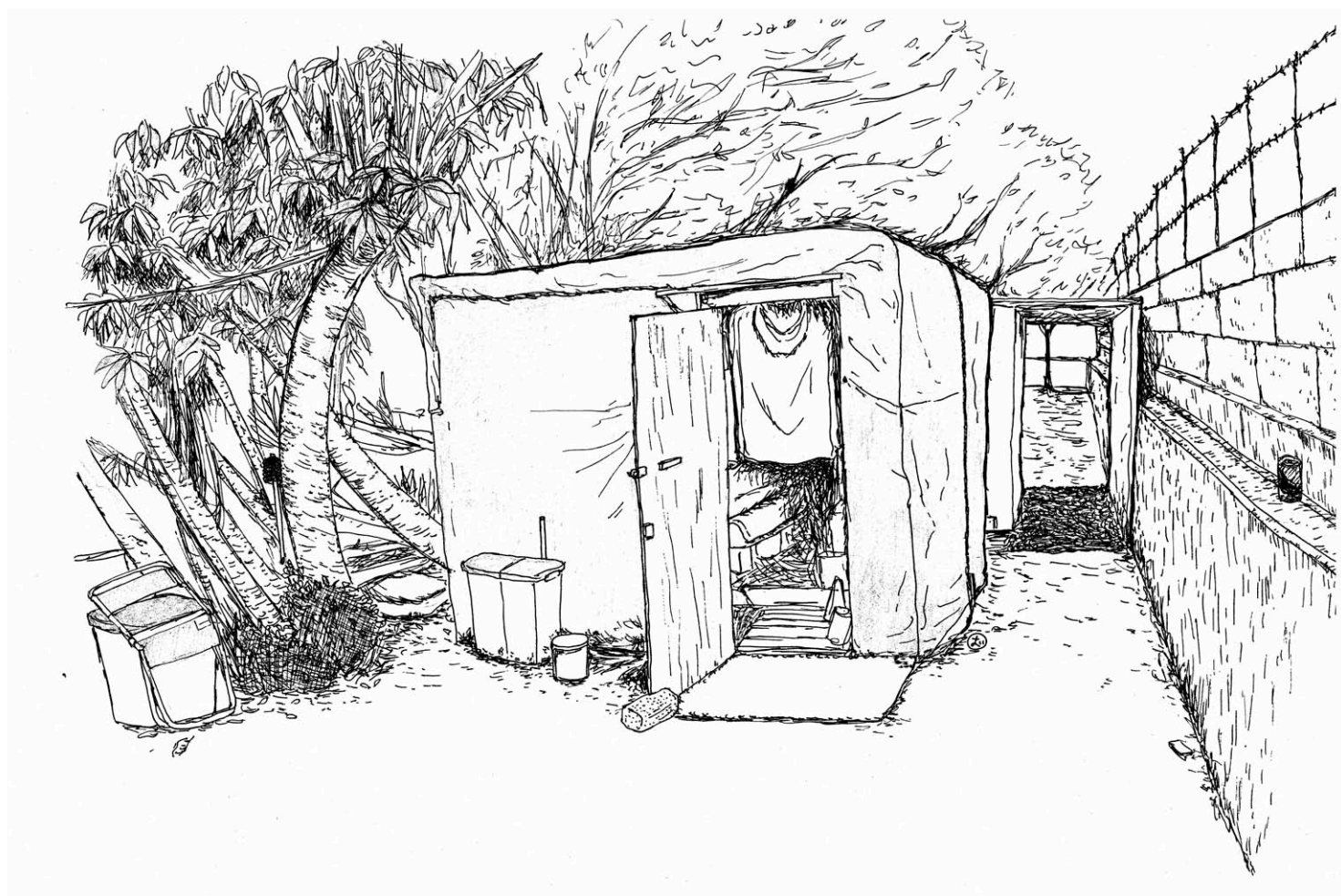


神戸 YWCA 夜回り準備会

活動報告書 Vol.5



はじめに

野々村 耀

これまでも、報告書の作り方を試行錯誤してきました。

2004 年度の報告書(2005 年 10 月発行)は初めての報告書なので、これまでの経緯や会の紹介、どんな活動をしているかといったことにくわえて、問題別に＜健康と医療、追い立てと襲撃、関連団体や施設、生活と仕事、生活保護＞を報告しました。しかし、問題別に書いてみると、一人の人が同時に様々な問題に直面し苦しむことが判り難いので、2005 年度報告書(06 年 11 月発行)では出会った人のことを中心に報告しました。Vol.3(2008 年 1 月)はもっと野宿している人の立場に近づきたいと思い、3 人の方からの『聞き書き』を中心におきました。大阪の長居公園での強制撤去に対する抗議活動に関する記事もあります。Vol.4(2009 年 2 月)は聞き書きと新しく試みた夜中回りの報告が中心でした。初めて手に取っていただく方にはあったほうがよいかと思って、会の成り立ち、会の活動内容、神戸市の施策や施設などを紹介する記事を載せてきましたが、繰り返しが多くなりました。

今年は、継続して参加できるメンバーがいろいろな事情で減ったこともあって、少し素朴なものにしたいとおもい、客観的な「報告書」というよりは、感じていることを中心にまとめました。

2008 年の 7 月ごろからの 1 年を考えると、初夏に洞爺湖サミットがあり、秋にはリーマンショックなどからの経済動乱、反貧困運動の拡大、派遣切りと「年越し派遣村」の冬、派遣切りの拡大の春など、世界規模で支配の仕組みが安泰ではなくなってきました。戦争で疲弊したアメリカはブッシュと決別して、オバマを大統領に選びましたが、戸惑っており、日本も、市場原理主義の痛みに耐えかねて、自公政権をいったん拒みました。しかし、アメリカをまねた 2 大政党制が、底辺の要求にこたえられるかどうか

は未知数です。

そういう背景の中の 1 年に、夜回りなどしなくてすむ社会を望みながら、相変わらずの活動をしている中で感じたことを書いてみました。

1. 野宿している人の状況 では、野宿している人は人数としてはかなり少なくなったが、かえって困難になった生活について、いくつかの切り口で報告しています。
2. 活動の中ででてきたこと では、活動に関する報告にくわえて、活動のあり方の問題（セクシャルハラスメントに関する問題提起）を報告します。
3. 活動の中で出会った人々 は聞き取りと、料理のレシピ
4. 活動外のできごと 反貧困キャラバンと反 G8 サミットにかかわったものの報告
5. 参加者感想

上記のような理由で、会の成立からその後の経緯、詳しい活動内容など毎年重複する記事を省略したので、巻末にこれまでの報告書の目次とコラムのタイトル一覧を貼り付けておきます。それは夜回り準備会のウェブサイトから PDF で見ていただくことが可能ですし、残部がありますので印刷されたものを、有料でお送りすることも出来ます。

そういうわけで、報告したいが書きそびれたこともいろいろあります。一つだけ、(今も未解決なので)書きにくい、書いておきたいことがあります。(生活保護費以上の)年金を受けているために、保護を受けられず孤立している人のことです。アルコール依存症と糖尿病、高血圧、そして記憶障害があるのですが、生活保護は受けられず、ケースワーカーがつかない。自分で解決しなければならないが、記憶が不確かだったりするので、金銭の管理もうまく出来そうにない。お金はあるが、野宿生活から出られない。どう手伝えればよいか、当惑しています。

目次

はじめに	野々村耀	1	
第1章 野宿している人の状況			
1-1 街が暮らしにくくなっている	野々村耀	3	
1-2 昼間駅舎で過ごす人たち	鍋谷美子	5	
1-3 野宿している人が捕まったら	鍋谷美子	6	
1-4 神戸市の見せかけパフォーマンス			
一定額給付金&新型インフルエンザー	鍋谷美子	9	
第2章 活動の中でできたこと			
2-1 夜回りの一日	中村祥規	11	
2-2 夜回り参加体験記 —『わいわい通信』より—	井上みち子・三浦啓子	12	
2-3 夜中回りを振り返る	中村祥規	15	
2-4 「ボランティア」公害？	中村祥規	16	
2-5 「野宿者支援」のなかの「男・女」	鍋谷美子	18	
第3章 活動の中で出会った人々			
3-1 真弓さんききとり	藤原史行・野々村耀	20	
3-2 小林さんに教えてもらったレシピ	野々村耀	25	
第4章 活動外でのできごと			
4-1 反貧困キャラバン報告	山本かえ子・今西裕哉	29	
4-2 デモ 3 days ～反 G8 現地キャンプ参加報告～	鍋谷美子	31	
第5章 参加者感想			33
巻末付録：これまでの報告書目次			41
神戸 YWCA 夜回り準備会 2008 年度会計報告、寄附・寄贈報告			42

【表紙】井上さんの「夜回り参加体験記」(12p)にも出てきたAさんの小屋。右側にはブロック塀と鉄条網。右側の高台にある駐車場の持ち主からテントが見えるとクレームがあり、追い立てがあったが、抗議すると苦肉の策か、見えないように神戸市がこんな仕様にした。左には夾竹桃が茂り、Aさんが綺麗に掃除している。(なべたに画)

第1章 野宿している人の状況

1-1 街が暮らしにくくなっている

野々村 耀

はじめに

「夜回り」などをしているという、「この頃、ホームレスが増えていますか？」と聞かれることがよくある。

数に関して言えば、実は私たちの夜回りで会う人の数や定住している人のテント・小屋の数はかなり<減って>います。しかし、状況が良くなっているのか、という意味では、必ずしもそうではありません。むしろ以前よりも息苦しくなっているという気がします。

08年末から09年にかけて、「派遣村」、「派遣切り」などと言う言葉がマスコミを賑わせたので、増えているのだろうと思い、増えたら大変だと思われるらしい。野宿する人の数が増えたら大変な問題、裏返すと、減れば一安心ということになるのだろう。

ここでは、今は生活の状況が、しんどいものになっている、困難が増しているということを二つの点で述べてみたいと思います。一つは、追いたてや襲撃、という、そこに人が、<いること>そのものが否定されている事に関してです。二つ目は、生活を支える手だて、収入についてです。

追い立てについて

これまでの報告書でも、毎回取り上げてきました。これらも、<人数>問題と同じように、追立ての回数が多いか少ないか、追いたてられる人数が多いか少ないかで、印象が変わりがちです。回数や人数が多いと大きな出来ごとだと受け取られ、大きな抗議行動があると、そしてテレビなどが報道すると「大

事」だと思われるが、大きなヨセバのある都会以外では、そして野宿している人が集団をつくって生活できる場所がなければ、ひとりふたりでは、なかなか抵抗することも難しいし、マスコミも扱わない。

だからといって、その人にとっては、深刻さに変わりはないのです。「すぐに出て行けと言われても、急には無理」というのが精一杯で、役所が、では「1カ月以内に」「2カ月以内に」というとそれ以上抗弁のしようがなくて、テントをたたんで移動せざるを得なくなっています。

昨（2008）年12月、ある公園で、3人の人に、追い立てがありました。

その一人の藤山さんは、「いまは仕事が続いているので、アパートを借りるくらいの収入はあるが、仕事が切れたら、家賃を払えなくなる。そのときに追い出されるのなら、借りても意味がない。」と言っていたのですが、役所に出ていくように言われて、アパートを借りました。しかし本人が心配していたように、2009年の7月、仕事が減ったために、家賃が払えなくなり、やむなく生活保護の申請をしました。

役所は、自治会、婦人会、近隣の人などが、「何とかしてくれ（要は、追い出してくれということ）」と申し入れると、強硬に圧力をかけます。繰り返して出て行くように言う、多人数で取り囲んで、「出る」と言わせる。この公園の場合は、婦人会の申し入れが、動機でした。運動場のある公園で、教育委員会も関係していたので、さまざまな部署から、人が出て、10人以上の人が、ここから出ていくようにと、迫ったらしい。もう一人の、山本さんは「しばらく待ってくれ、2月末には、出ていく」と答えました。しかし移動する先のアテがあるわけではなかったのが、結局、同じ公園の中の通路を隔てた向かい側に移動した。それまでは、テントで雨露をしのいでいたが、移動してからは、テント無しで、地

べたで寝ているのです。このような追いたてに、何か意味があるのだろうか？

最近の神戸では(実はほかの地域でもそうらしいが)、いろいろな名目で監視体制が強化されている。大げさなものでは、「テロ対策」、不安をあおる意味では「不審者対策」、ソフトには、「美化」。あらゆるところに、監視カメラ設置。休むことが出来そうなベンチは、横になれない様に、変な仕切りをつける。公園に死角をなくし、身を隠せるような物陰がなくなった。植え込みや茂みが姿を消し、コンクリートと石ばかりの無機質な公園ばかりになって来ている。横断歩道橋の階段の下(そこは雨露をしのぐことのできる数少ない場所)は金網で囲われて入れない。三宮には、金網でなく、アクリル板で囲んで、まるで飾り窓かと思うような、階段の下の空間がある。多分私たちは、見たくないのです。直視すると、いろいろ考えねばならなくなる。だから、遠くに追いやって、私たちのそばには、そんな問題はない、と思いたいのかも知れません。

襲撃について

石を投げられた、悪罵を浴びせられた、などという類の事件は僕らが知っているよりはるかに多いようです。夜回りのたびに、変わったことはないですかとたずねるが、何もないといわれることが多い。しかし、少し大きなことが起こってから、実はしょっちゅう投石されていたことが判明したりします。

2009年の夏前に、ある川の橋の下に住んでいる人(の住まい)に向かって、中学生・高校生くらいの若者が、花火を打ち上げたので、「火事になると困るから、違う方に向けて欲しい」と言ったところ、「おっさん殺したろか」などといわれ、留守の間に、乾かしている洗濯物を地べたに落とされたりするという事件がありました。その人は、以前火炎瓶を投げつけられたことがあったので、争いにならないように気を付けている、というのが、なぜそんなことをするのか。

こうした事背景には、野宿せざるを得ない人を、自分達とは異なる存在、そこにいることを許されないものとみなそうとする感覚の問題があります。最近一面では、自分や家族だって、何時失業する分らない、そうなれば自分の暮らしだって、いつ崩

れてしまい、野宿することになるかもしれない、と言う不安があり、不安を振り切るように、自分は違うと思いたいのかも知れない。いずれにしても、そうせざるを得ない人の存在をちゃんと受け止めることを避けたがっているように思えます。

収入の悪化について

ホームレスは働かない。何もしないで暮らしている、という風に、見当違いの誤解をしている人が少なくありません。(註 しかし、この金の支配している時代に、何もしないで生きられる訳がありません。)

公共事業が削減されたり、景気が悪くなるまでは、道路建設や、建築の仕事をしている人が少なくなかった。神戸でも、港の荷役、造船所、工場の雑役など、いろいろな仕事があったが、震災で多くの人が仕事を失いました。

震災後、一時的に壊れた建物や町の解体整理と復興建築の仕事があったが、97年夏前に仕事は激減し、野宿する人が増えました。その頃から日雇いの仕事は少なくなり、粗ごみで食べているという人が多くなった。粗ごみの中から、売れるもの(家電製品、家具、装身具・時計、掛け軸など骨董品等々)を見つけ出し、リサイクルショップや古物商に買ってもらって生計を立てるのです。この仕事は、見つけたものが売れるかどうか見極める目利きの能力が必要だし、買ってくれるところを知らないと売れない。また、身元を確かめられることもあって、簡単ではない。プレイステーションのようなゲーム機でも、製造番号によって値段が違ったりします。

以前は、工事現場で捨てるような太い電線を貰って、被覆を剥ぎ、銅線として売る人、エアコンを解体して銅パイプを取り出して売る人も少なくなかった。ラジオ、テレビ、ステレオ、ビデオなどの家電製品が良く売れる時期もありました。これらの家電製品は、壊れていても、東南アジアに送ると、現地で修理して売れるので、業者が買い取ってくれます。しかし、1990年代末のアジア通貨危機のとき、粗ごみから出た家電製品の輸出がしばらく止まってしまった。

また、2001年、家電リサイクル法(特定家庭用機器再商品化法)が施行されると、エアコン、テレビ、冷蔵庫・冷凍庫は「ごみ」として捨てられなく

なった。当然、それらを集める仕事は成り立たなくなりました。また PSE 法（電気用品安全法）によって、その他の家電製品も買い取ってもらえないという話が飛び交ったが、結局うやむやになった。いずれにしても、最近は家電製品はコンポや、ゲーム機くらいしか集められなくなっています。

粗ごみを集めている(野宿している)人にとって、自動車で粗ごみを集める人は脅威になっています。野宿している人の運搬手段は、よくて荷台を大きくした自転車だから、自動車で集められると、速さでも、運ぶ量でも太刀打ちできない。

粗ごみの目利きの出来ない人は、以前から、アルミ缶やフライパンなどを集めて、回収業者に買ってもらっていたが、粗ごみの仕事が激減したので、これまで粗ごみで暮らしてきた人もアルミ缶を集めるようになり、競争が激しくなってきました。

2008 年は夏に向かって、アルミ缶の価格が大きく上昇した年です。一キロ 60 円くらいまで下がってきたアルミが、中国の経済成長のゆえか、オリンピックに関連があるのか、急上昇し、8 月にはキロ 180 円にまでなった。しかし、9 月から急落し、60 円、50 円、40 円と値下がりしました。しかも、量も集まらないので、収入が三分の一、四分の一になり、ちゃんと飯が食えない人が多くなっています。その時期、2008 年 11 月に、神戸市のゴミ回収・収集の仕組みが厳しくなり、アルミ缶を含む資源ごみは、ひとつのごみステーションでは月に二回の回収日に出さねばならなくなりました。その結果、集める人の側から言えばある日に集められなければ、2 あるいは 3 週間後まで集められないことになる。つまり、ある日集められた缶の売り上げで、2~3 週間先まで食いつながなければならない。特別集めるのがうまい人は別として、多くの人は、食べるのが困難になってきています。

粗ごみのリサイクル、アルミ缶集めは、集めたものを保管したり、缶をつぶしたりする場所が必要だから、都心部のビルの軒下で寝る人にはできる仕事ではありません。そういう人が食いつなぐのに、ファストフードやコンビニの時間切れの弁当をもらうという手段がありました。これも最近は貰いにくくなっていたのですが、セブンイレブンでは、コンビニの店主が、時間切れ近いものを安売りできるよ

うにと言う訴訟を起こして、本部に勝訴したので、時間切れだから廃棄すると言うのではなく、そうなる前に値下げして売り尽くそうということになりそうです。

無駄な公共事業を減らそうと言うことも、資源ごみの回収にしても、それぞれに理由があることですが、結果として、それらで暮らしてきた人がこれまで以上に苦しくなることに誰も気がつかないことに、苛立ちを感じます。



1-2 昼間駅舎で過ごす人たち

鍋谷 美子

その人たちは、まさに、駅の中にいた。3 月に入った頃、YWCA やカトリック社会活動神戸センターの方に何度か電話がかかってくるんです。とそのたびにその駅の周辺を探し回り、道で座っている人に、電話をくれた上嶋さんですか？と聞いても違います、と言われる。そんなことが繰り返され、一体どこにいるんだろう？とすぐに切れてしまう公衆電話からの何回目かの電話で、ようやく駅の中の待合室にいるということが確認でき、すぐに行ってみた。昼間の駅は、もちろん人が何人もいる。その中で、電車を一本やりすごし、それらしき人がまだいるのを確認して、ああ上嶋さんだ、と分かった。

上嶋さんは一緒に行動していた高垣さんと 2 人、確かに待合室にいるのだが、電車を待っているという様子ではなく、なんとなく、ここで過ごしているんだな、という雰囲気が感じられた。2 人とも身奇麗な感じで、リュックやかばんもそう大きくはないのだが、周りに新聞が敷いてあったり、長く居る人

という様子だった。お金がないので、昼間電車の中や待合いで過ごし、野宿仲間にお弁当が出るところを教えてもらって、そこへ移動する、という生活だった。

2人であることと、普通に待合室には何人もの電車待ちの人がいるので、相談を受けにくい環境ではあったが、上嶋さんはおかまになしに喋り出す。見た目も若く、長く野宿しているようにも見えない。今年で40歳になるという。家族が借金を抱え、家を手放して一家離散。友人宅に居候しながら派遣で働いていたが、年の瀬の12月27日に仕事を失い、友人宅も出たとのこと。もともと神戸の出身で、三週間食べられなかったのち、灘区役所に相談に行くと、更生援護相談所を紹介され、更生に行くと、ハローワークを紹介されたという。派遣切りにあったのなら、ハローワークへ、ということだったらしいが、上嶋さんの場合、日給が5750円と安くて契約を更新せずに次の仕事を探すが見つからず、ということだったので、正確には派遣切りではなくハローワークの支援の対象からは外れていたようだ。それで雇用促進住宅のあっせんや貸し付けなどはできないと言われ、たらい回しされた挙げ句、何の支援もないことに怒り、更生の職員への不信が募って結局泊まらずにいたとのこと。

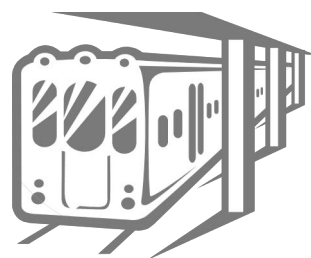
高垣さんの方は52歳。9月に派遣切りにあい、正社員への切り替えを言われるも、日払いでないと生活が維持できなくなるので、切り替えせず。その後、家族に2〜3000円単位でお金を借りながら仕事を探すも全て落とされたという。1月20日まで、西成のドヤに滞在していたが、お金が尽きて野宿。西宮出身。西成に行く前は灘の公団にも住んでいたそう。それでこっちの方に来て、野宿しているという。

2人とも、アパートなどで生活保護を受けたいということだったので、できるだけ早くということもあり物件を多く知っているカトリック社会活動神戸センターの方に相談し、そちらで保護申請をするということになった。

こうして少しでもいい条件の仕事に就こうと仕事を辞めたのちに次が見つからず、野宿になってしまった人に、届くような施策がない。それが嫌なら

我慢して仕事を続けろ、とでも言いたげだ。しかし、福祉、保障がしっかりしていれば、低い賃金や保障の中で体をすり減らしながらその仕事にしがみつ়く必要はない。福祉がしっかりしていないということは、酷い労働現場を温存するという状況を生む。

派遣切り派遣切りと騒がれたが、こういったごく不安定な形で野宿をする人が、その後どうやって暮らしを立て直していくかで考えられた施策は結局ほとんどない。あれだけ騒がれたにもかかわらず、生活保護以前に使えるものが新たに作られることはなかったのだ。駅の中を移動する上嶋さんたちに会って、そのことを強く思った。



1-3 野宿している人が捕まったら

鍋谷 美子

6月27日、神戸の冬を支える会の青木さんから、掛井さんという人が自転車窃盗で捕まっていて、国選弁護人から相談を受けたという連絡が入った。私たちが夜回りで会っていたあの掛井さんだ！とすぐに浮かんできた。それまでも自転車を集めてしまう癖のある掛井さんは、いつか捕まるんじゃないかと周りの人にも心配されていた。

7月2日、青木さんと一緒に拘置所に接見しに行くことにした。累犯だったので、すでに起訴され、拘置所に移送されているということだった。果たして、拘置所で会えたのは、私達の知っている、穏やかでおとなしいあの掛井さんだった。

10分ほどの面接時間の中で、青木さんが出所したあとの身の振り方について、必要なことをさくさく聞く。掛井さんは「(出たら)もう野宿はやめます」「職業安定所に行きます」などと言っていたが、

どこまで話が通じているのか、ぼんやりしていて分かりにくい。弁護士さんによると、生活保護を受けたいかもしくは、更生センターに行きたいような話だったそうだ。安定所、が何のことを言ってるのか分からないが、野宿ではなくどこかで暮らしたい意思を感じられた。食べるよりお酒が好きで、つい飲んでしまう掛井さんなので、生活保護でアパートに入ったら自分で食事などもつくれた方がいいし、金銭管理もしないといけない、など話す。ドヤと施設の違いを説明するが、どっちがいいとかは今は分からない、とのこと。申し訳なさそうに話を聞いていた。

掛井さんはすでに起訴されていて、それで拘置所にいた。おおざっぱに分けると、留置場は起訴されるまで（最大23日）、拘置所は起訴されてから判決が出るまで、刑務所は刑が決まってから服役するところ、という感じだ。

初公判は7月11日、神戸簡易裁判所でということだった。累犯なので、執行猶予がつくのはむづかしいかもしれないという。ごく最初の段階から出たときの話をするのは、もちろん出た後途方に暮れないよう、ということもあるが、出たあとの居所などがしっかり(?)していると判決にも影響があるからだそうだ。野宿している人が、微罪でも起訴されたり捕まったりするのは、野宿しているから（身元を証明できない）ということが影響している。身柄引き受けできる人がいないと、そのまま拘束されてしまったりするというのだ。こうしてときどき、警察からガラ受け（身柄引き受け）の連絡が夜回りのメンバーに入ったりする。

また、住むところが決まっていなくて（野宿はテントで定住しようが「住むところ」と見なされない）ということで、その人の信用はがくっと下がる。これは、仕事を探すときや何か手続きをするときも同じだ。住所を持っていないと、その人のアイデンティティが保証されない社会なのだとつくづく思う。

それで、捕まってしまう出たあとに「ちゃんとした」住むところが決まっていたり、誰か「指導」してくれるような人なり団体なりがある、ということが判決に情状酌量の余地を与えるということだった。青木さんも、言葉を選びながら、説明してくれ

た。ここ何年か弁護士さんから、刑を終えたひとの受け皿がないということで、相談がどんどん増えているそうだ。

初公判の日、青木さんが情状証人に立ち、今月上旬の面会では「生活保護を受給してアパート生活をしたい」と本人の希望を聞いたこと、兵庫区のドヤ入居を大家さんに了解してもらっており、そこに入居して生活保護手続をする予定であること、支える会などの支援者との関わりによりサポートする態勢があることを証言した。

7月18日に出た判決は、懲役10ヶ月、保護観察付き執行猶予4年というものだった。執行猶予はむづかしいか、と言われていたが、情状証人の存在が判決に影響したのだろう。公判の後、すぐに拘置所に向かい、無事掛井さんと合流。その後、陳述書で予定していた兵庫区のドヤに入居し、保護申請も無事に終了。その間に故郷の話を聞く。実家は千葉で、成田空港建設で土地を売ることになり、おばあちゃんはハチマキ巻いて反対運動に意気込んでいたそうだ。掛井さん自身は、震災まで御影のアパートにいたのだが、そこが全壊してからは決まった家はなかったそうだ。アルコールの問題があり、タクシーの運転手などをしていていたが、事故で仕事ができなくなってしまい、野宿になっていった。

ドヤに入居した4日後、保護観察所への同行のため青木さんと夜回りメンバーで掛井さん宅を訪ねた。留守だったが部屋は使っている様子。判決確定は判決2週間後だし、「すみやかに来ること」となっているだけなので、また青木さんが覗いてみるよ、ということになった。しかしその後、掛井さんには会えないまま8月になる。そして8月9日の夜回りで、再び掛井さんと石屋川で会うことになる。

そのときの話では、部屋は家賃が高いから…、暮らし慣れたこっちの方がいい…、などと話していたが、いまいち生活保護の仕組みや状況が理解できていないのでは、という感じだった。それまでも、お酒を飲んでぼーっとしていることがよくあり、周囲の人は認知症なのではないか、と心配していた。執行猶予中なので、保護観察の手続きをしないと捕まってしまうということも伝えた。

その後、何度か夜回りで会うが、お昼には会えず、

暮れも押し迫った12月、掛井さんが検察庁に保護されたという知らせが入った。執行猶予中にもまた自転車を集めていて、時間の問題かなあと話していた。本人には一貫して、罪の意識や、そもそも盗んでいるという感覚があるのだろうかという疑問があった。自転車もただ公園に並べておいておくだけ。それでも窃盗には違いなく、結局収監されるこ

掛井さんは、食うための犯罪、というのとは違いますが、犯罪でも犯さなければ食べていけない、もしくは「塀の外では食べていけない」ために、微罪を犯して自分から捕まる、という事件は全国的にも増加している。私たちも、何度も刑余の人に出会い、その後の行き場のなさを感じる。まさに貧困が生み出す犯罪、犯罪をなくそうと思うなら貧困をなくさなければいけない。

そして、掛井さんの場合、意識的な犯罪というこ
とでもない。そういう、あ
る種判断能力のないよう
な人がどうやってうまく
暮らしていけるか、そうい
う意味での貧困について
もつよく考えさせられた。

掛井さんの裁判で情状証人に
立った、神戸の冬を支える会事
務局長の青木茂幸さんのイン
タビュー記事。『神戸新聞』2008
年6月6日

法廷でホームレス支援

窮状訴え、情状出廷6年



罪を犯したホームレスらの情状出延を続ける「神戸の冬を支える会」事務局員の青木さん＝神戸市中央区、神戸地裁

神戸の冬を支える会
事務局長

貧困、高齢化：切々と

物損被害。神戸市立更生
援助相談所で暮らし、服
薬の体内労働で月収は約
四万円。執行猶予期間中
にパチンコ店へ、負けた
青木さんは生計維持の

受取手紙や、持病の治療がきつかなかった。五十四の年を力尽きて、自立を棄てて述べ、弁護士は再度の執行を求めたが、男は下されたのは懲役六月の実刑であった。

い罪。身分保証人がいれば釈放される場合がほとんどだが、身割りがなかったため、「自己中心的で短絡的犯行」と裁かれていく。支援活動で晴感した生活困窮者の自立の機しき、受け皿のもろさを裁判官や検察官に訴えたが、つた。

支援の末に杉谷留置されてきたのは、まだ数人。間島沼田事件も終結しても、いつの間にかいなくなったり、再び事件を起こしてしまったり被害人もいる。弁護士からの出ば依頼は増え続ける。西木さんは「韓国だけが奇蹟ではないが、高齢者の再犯も増えている。できる限り支援していきたい」と話します。

（熊田 恵）

【神戸市の施策を報道した新聞記事】

神戸市 2009年(平成21年)3月4日 水曜日

神戸市は3日、定期給付金を路上生活者に通知するため、市職員が公衆などでチラシを配った＝写真、西畑志朗撮影。

定期給付金は2月1日時点の住民登録をもとに登録先の自治体が支給する。自治体は住民の登録住所に申請書を送るが、路上生活者は大半が受け取れないとみられている。神戸市は、市内での住民登録と身元を確認できれば、窓口で申請書を受け取り、チラシには制度の仕組みと相談電話番号を記載した。

同市には昨年1月時点で約1100人の路上生活者がおり、この日は職員が東灘区、灘区、中央区でチラシを手渡したり、不在のテントに置いたりした。

一方、昨年1月時点で約3600人の路上生活者がいた大阪市は「人数が多すぎて十分な周知はできそうにない」と特別な対応は考えていないという。

青テント回り 給付金PR 神戸市



上：『朝日新聞』

中：『読売新聞』

左下：『神戸新聞』

いずれも 2009 年 3 月 4 日の記事

2009年(平成21年)3月4日(水曜日) 読売新聞

定期給付金申請法のチラシ
ホームレスに配る 神戸市

定期給付金の支給を前 ネットカフェで暮らす人らに、神戸市は3日、東灘区や灘区の公園などで市職員がチラシを配り、市は「できる限り多くの人に支給できるように」として、市職員の巡回による配布を行っている。

この日は市の担当者らが街頭で、「お断りやご迷惑などいらないで声をかけながら、チラシをホームレスの方に手渡し、」と声をかけながら、市職員の巡回による配布を行っている。

市は「生活に必要なお金を手に入れたいが、住民登録が今どうなっているかわからず、申請書も届かない」と受け取る人が多かったという。

市によると、市内のホームレスは約1000人。市は「まだ必要な施設に達しない」として、今後も公園など「スリ」チラシを配布する。

定期給付金の説明チラシ
路上生活者に配布 神戸市



ホームレスの男性に、定期給付金のチラシを手渡す神戸市の職員＝3日午後、神戸市東灘区内（撮影・西畑志朗）

定期給付金の申請書を送るため、市は「できる限り多くの人に支給できるように」として、市職員の巡回による配布を行っている。

この日は市の担当者らが街頭で、「お断りやご迷惑などいらないで声をかけながら、チラシをホームレスの方に手渡し、」と声をかけながら、市職員の巡回による配布を行っている。

市は「生活に必要なお金を手に入れたいが、住民登録が今どうなっているかわからず、申請書も届かない」と受け取る人が多かったという。

市によると、市内のホームレスは約1000人。市は「まだ必要な施設に達しない」として、今後も公園など「スリ」チラシを配布する。

第2章 活動の中でできたこと

2-1 夜回りの一日

中村 祥規

夜回り準備会では第2・4土曜日の月2回、野宿している人を訪問する「夜回り」をしています。ここでは、夜回りの一日の様子を紹介します。

■ オリエンテーション (17:30～)

初めて参加する人がいる場合には、活動の前にオリエンテーションを行なっています。一日の活動の流れ、活動の目的、活動に参加するにあたって気をつけてほしいことなどを説明しています。このオリエンテーションは、初めて参加した人が、野宿している人にプライバシーをいきなり聞き出すなど、会の活動目的を外れた行為をするといったことがあったため、行なうようになりました。

■ 準備 (18:00～)

初参加の人以外は、18時にYWCA分室に集合します。夜回りに持参する持ち物の準備をします。こまごまとしたものを入れているかごの中身を確認し、お湯を沸かしてポットに入れます。かごの中には、インスタントコーヒー・紅茶などの飲み物類、胃腸薬などの市販薬¹、石鹸、ランプ、ビラなどが入っています。また、第4週は、おにぎりを持っています。夜回りには時間的に参加できないけれどという人が来て、作ってくれています。

このほか、季節に応じて、使い捨てカイロ(冬季)、毛布(冬季)、蚊取り線香(夏季)などを持って行くこともあります。また、この間に、当日のコース分けを行ないます。

¹ 体調の悪い人には「医者に診てもらう」ようにすすめているが、健康保険も金もないまま病院で治療は受けられない。唯一の方法は更生センターの嘱託医(月・木)の見立てで、要治療となり、更生援護相談所に泊まれば通院できる(重篤な場合は入院)。土曜の夜回りで風邪や下痢を訴える人には、日曜一日分の家庭薬を渡し、治ってなければ月曜に更生センターに行くよう勧めている。

■ 事前ミーティング (18:30～)

準備が整い、全員が揃ったところで、ミーティングを始めます。初参加の人がいる場合は、それぞれ簡単な自己紹介をします。その後、その日に回るコース、グループ分けなどが説明されます。また、前回までの活動で気になっていることについて、確認します。たいてい、2つか3つのグループに分かれてまわります。1つのグループは、その日の参加者数にもよりますが、2～4人です。

■ 夜回り (19:00～)

夜回りの出発は、19時が定刻です。灘区・東灘区という広範囲を回るので、移動は車が中心です(最近では、ドライバーやコースリーダーが足りず、徒歩のコースを1つ設けることも多くなっています)。野宿している人のところを訪問して、世間話のほか、最近の体調や仕事の様子を聞いたりします。話を聞くときには、ポットのお湯で作ったコーヒーなどの飲み物を勧めたり、一緒に飲んだりすることもあります。

ここ1年(08～09年)の訪問先で会える人は、少ないときで10人、多いときで17人といったところです。ここ数年は、ずっと訪問先が減少していたのですが、今年7月の一斉夜回り²のとき、新しく出会った人もいて、最近少し増えました。長く訪問していて顔見知りになっている人の中には、私たちの訪問を待っていてくれる人もいます。

■ 事後ミーティング (21:30～)

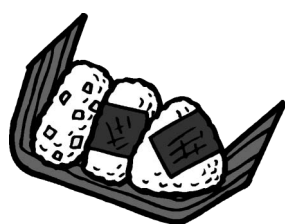
各グループは、21時をめぐりに分室に帰ってくるようにしています。事後ミーティングでは、各コースで聞いた話を報告しあいます。生活保護の希望、

² 神戸市内で野宿している人の数を把握することを主な目的として、複数の野宿者支援団体が共同して行なっている調査。毎年7月はじめ、神戸市内を一斉に巡回して、目視でカウントしている。

病気、襲撃などの話があった場合には、どう対応すればいいかみんなで話し合います。初めて参加した人には、感想を話してもらっています。ミーティングを終え、かご・ポットなどの荷物を片付けたら、解散です。解散の予定は、22時です。

■ まとめ

以上が、「夜回り」のおおまかな流れです。夜回り準備会では随時、参加者を受け入れています（希望者が多い場合などは、次回以降の参加をご案内することもあります）。関心をもたれた方は、神戸YWCAまでお問合せください。



2-2 夜回り参加体験記

— 『わいわい通信』より —

「1995年の阪神・淡路大震災を契機に、神戸YWCAでは9つ（現在8つ）のボランティアグループが生まれました。神戸YWCA地域福祉部は、それらのグループの横の連携を深め、神戸YWCAの考える地域福祉～ひとりひとりが存在そのものを大切にされる地域社会作り～を実現するために活動しています」（『わいわい通信』はじめに、より抜粋）。

地域福祉部には夜回り準備会のほかに、高齢者への配食サービス（『わいわいランチ』）、会食・デイサービスなど的高齢者サポート、子どもや母親、家族のためのスペースなどの活動があり、その活動を紹介する『わいわい通信』という冊子が年2回発行されています。以下では、神戸YWCA会員で地域福祉部委員の井上さん、三浦さんが、夜回りに初めて参加したときの体験記を、『わいわい通信』14号（09年10月発行）から転載します。

「夜回り」と「おにぎり」初体験！

井上 みち子

私は、週1～2回「わいわいランチ」のボランティアをしています。同じ分室を活動拠点とする夜回りメンバーが「昼回り」で分室に立ち寄られた際にお話する機会もありますが、「野宿している人の生活支援」活動等は分かっていません。今回「わいわい通信」で「夜回り」グループを紹介するために、8月8日に「夜回り」活動を体験しました。

午後5時30分から始まった初心者のためのガイダンスでは、夜回り準備会の概要と野宿している人に失礼がないようにとの諸注意を聞きました。その諸注意とは、①自分の“予想”や“先入観”を括弧に入れて野宿している人と会う、②懐中電灯で相手を一方的に照らさない、③プライバシーや収入源などをいきなり訊かない、等。①は難しいが、②③ははっきりした指示なので、当たり前のことと受け止めました。しかし、私はその時点で夜回り活動や野宿する人への関心・好奇心がなかったのです。実際はどれも難しいものでした。

次に事前ミーティングに参加。前回の報告やメンバーの質疑応答を聞き、3つのグループに分かれて7時過ぎに「夜回り」に出発しました。私は、東灘地区をふたりの若者と回りました。4人の方に会いました。駐車場奥に「小屋を建てている」Aさん、潮の匂いのする海岸のすぐ傍らに「廃車を住み家とする」BさんとCさん、公園のベンチで寝ていたDさん。メンバーのふたりが小声で話しかけます。最初の一声が難しいそうです。私は後ろで持参物バスケットを持って立っていて、「蚊取り線香が有り難いわ」と聞こえると、それを渡す。「コーヒーでいいですか」との声かけに応答されたと思うと、紙コップを出し、コーヒーや砂糖の袋を破り、コーヒーを渡す、それだけでした。が、そのやりとりの中に入れてもらえたと感じると、顔がはっきり見えないうもどかしさを感じたり、つい、いろいろと質問してしまいました。

9時前に分室に戻り、記録を取る。といっても、若者メンバーの話すとおり記述。その後、3グループで活動のつき合わせをしました。そこで、私は体験した事を細かくしゃべりました。そして感想。「自分の居るところを少しでも住みやすく、ゴミ箱なども置いてきちんとされている。当たり前の人な

んだと思った」と言いました。そこへ熟年メンバーのつつこみ。「当たり前の人だった、というのはそうじゃないという思いこみがあったのではないかと。ガーンと脳天に響きました。その後の論議は上の空でした。

10 時過ぎからはある方の状況や支援についての話が続きしました。報告者の話を丁寧に聞いて、しっかり考えるという姿勢が窺えました。論議の途中でしたが、私は疲労困憊で 11 時過ぎに退席しました。

この日の夜回りメンバーは老（熟）若男女 6 人。みなさん、落ち着いて穏やかな態度で活動していました。野宿している人との関係性を作ることから始まる活動には、もの静かな雰囲気が必要だと強く思いました。人手がないなか、初心者を受け入れていただき、感謝でした。そして、お騒がせしました。



2 週間後の 8 月 22 日は「おにぎり」作りに参加。午後 4 時 30 分に分室に到着。担当の Y さんは、すでに 2 升を越えるお米を研ぎ終えていました。まもなく M さんもお見えになり、お米の吸水と炊飯の間にお二人にいろいろうかがいました。

この「おにぎり」活動は、「夜回り」で会う野宿する人に作りたてのおにぎりを届けようと、2006 年 1 月から始まりました。Y さんは、それまでも 2 回夜回り活動に参加していたが、活動終了時刻がかなり遅くなるので、たびたびは参加できなかった。「おにぎり」を作ることなら、趣旨はもちろん時間的にもよかったので、引き受けたそうです。すぐに賛同して活動を始めた M さんは YMCA のお仲間、二人で「おにぎり」を作ることが多いが、ピンチヒッターも控えていらっしやるとのこと。

「3 年 8 ヶ月は、あっという間。1 ヶ月に 1 回というペースだから続いている。野宿している人のた

めに、残り物や代替物ではなくて、お米を研ぐところからおにぎりを作る、このことに意味があると思っている。野宿せざるをえない方においしく食べてもらいたい等と思いながら作っている」「『おにぎり』活動をして関心が広がった。まだまだ学ぶことがたくさんある」「駅前で『ビッグ・イシュー』を見かけたら購入するように心がけている」「外国でボランティア体験（インドやモンゴルのストリート・チルドレンと接する等）をして、日本で報告やチャリティー活動を広げることにも携わっている」等々。本当に豊かなボランティア体験や活動に寄せる想いをお聞きし、私は喝！をいただいた気分でした。

1 時間強の楽しい『緩』時間が過ぎると、『急』時間がやってきました。ご飯が炊きあがって 10 分ほどで大しゃもじでかきまぜる、テーブルに 10 枚ほどラップを敷き塩をふる、ご飯をのせる、その上に梅干しやじゃこ、塩コンブをのせる、ラップごと三角に握る、俵型に握る、またラップを敷き塩をふる、を繰り返し、60 個に少し足りないおにぎり（サイズは 2L ぐらい！）を作ったのでした。今回は私と S さんが体験で加わり四人でおこないましたが、いつもは二人で 30～90 個にぎっているそうです。できあがったおにぎりを 3 つの箱に分け入れ、味付けのりの小袋と味噌汁のパックを加えます。一人におにぎり 2 ケ、のり 2 袋、味噌汁 1 パックを渡します。今回は多めに作り、「夜回り」メンバーにも食べてもらえるといいわねえとのこと。Y さんが声をかけ、夜回りメンバーに引き継ぎました。その間も手を止めることなく洗い物や片付けをして、6 時半には終了。「夜回り」に出かける直前の慌ただしい雰囲気の分室を抜け出しました。

「おにぎり」のためのお米を「わいわい通信」の最後のページで募っていますが、古くなるので現金や商品券（おこめ券）がいいようです。また、おにぎりの中に入れる梅干しやじゃこや塩こんぶ、のりの小袋、味噌汁パック等はお二人の差し入れです。なので、お米や梅干し、味噌汁等の購入に充てる「おにぎり」カンパも募りたいと思いました。

2 つの体験を通して、私のボラ活動観や今までの先入観を問い直され、今はこう思っています。「野

宿している人は住まいを欠いていても普通の人だった。だからこそ、衣食住足る生活に戻れるよう支援すべきだと強く思う。YWCA にその支援グループがあるのは誇りであり、得難い機会である。会員やボランティアはさまざまな形で『夜回り』活動に参加しよう。『夜回り』が安定して運営できるようにカンパを募ろう」。



緊張の思いで・・・

三浦 啓子

夜回り体験当日を、緊張の思いで迎え、いつもの道を分室へ急いだ。

その日、午後6時頃からメンバーが次々に現れ、慣れた手順でポットにお湯を入れ、訪問の準備が忙しく始まった。私の知っている分室とは全く違う光景である。“夜回り活動の拠点”となっている分室のもう一つの大切な役割を改めて実感した。まず初参加の私たちへのガイダンスがあった。それから集まったメンバー全員でミーティングがあり、その日の訪問先と役割分担、注意点を確認し、三班に分かれて7時過ぎに出発した。

私は、二人のメンバーと一緒に車で灘地区を回ることになった。一軒目の訪問先は、歩道橋の下の空間をうまく利用したOさんの住まいだった。入り口の両側に整然と並べられた家財道具にまぎびっくり。Oさんのインタビュー記事を読んでいたのでお会いしたかったが、残念ながらお留守で、お知らせのちらしを置いて帰る。

二軒目へは、そこから車で5分ほど移動した。住まいは大型トラックの往来の激しい道路沿いにあり、雨避けのブルーシートで丁寧に覆われている。私たちが「こんばんは」と声をかけると、Iさんは

家の中から快く出て来られた。持って行ったポットのお湯でお茶を入れ、みんなで地面に中腰になり、しばらく歓談した。でも騒音がひどく、耳を立ててもなかなかIさんの話が聞き取れない。神戸に来られてまだ一年くらいで、どんな生活支援があるのかよく分からないということであった。近いうちに再度訪問して、じっくりIさんから話を聞くことを約束して帰る。その場での迅速な対応を見て、この活動を担っているメンバーの経験の豊富さと誠実さを感じられた。私がこの体験で初めて出会ったIさんは、とても穏やかで健康的な人だった。そこから数メートル離れたテントに住んでいるHさんも、いつもの訪問先である。その夜は、何度声をかけても返事がなく、訪問しましたというお知らせにビラを置いて帰った。次のFさんは、河川敷にテントを張っておられるということで、暗がりの中を、目を凝らして探したが、見つからなかった。何処かに移動されたようだ。

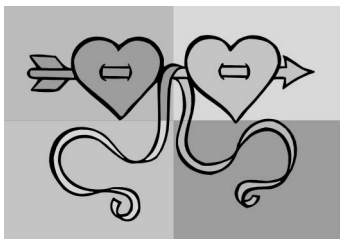
五番目の訪問先Kさん宅は高架下であり、車を降りて暗い細道を、懐中電灯をたよりに少し歩いて到着した。今帰ったばかりというKさんは、同行のメンバーとはもう顔馴染みのようで、話が弾む。私もここでは中まで入らせてもらい、暮らしぶりを見て、Kさんと少し近づけたようでうれしかった。4、5日前、近くで花火をしていた若者とトラブルがあり、また襲撃されるのではと、Kさんは恐怖を感じておられた。もし何かあったら、夜回り準備会に連絡することを、お互い確認し合う。Kさんは、夜回りの活動を信頼し、本当に頼りにされている様子だった。帰り道、私たちの後から電灯で道を照らしながら見送ってくれた、Kさんのやさしい心遣いが印象に残っている。

最終の訪問先Mさんの住まいは、公園の中にあった。雨避けのシートはなかったが、家財は全てビニールシートが被され、きちんと整頓されていた。木につり下げられた大きなカレンダーが、Mさんの日常生活を表現していて、興味深かった。Mさんは、心身ともに強靱そうに見受けられたが、このところの暑さで夜はなかなか寝られないと嘆いておられた。Mさんからご近所の方の情報もいろいろ聞くことができた。

分室に帰ったのは、予定どおり 9 時過ぎで、それから私たちの班の記録を整理し、後のミーティングで報告。他の班の活動も詳しく報告され、皆で体験を分かち合うことができた。報告ミーティングの後、支援の方法をめぐり、この日も夜遅くまで議論が続いた。

帰宅してから、夜半に雨が本降りとなった。テントがなかった M さんはどこに行かれたのかな、シートを張っていた I さんも雨漏りしているのではと考えていたら、なかなか眠れなかった。あの日から、雨が気になる。実際にひとりひとりの方に出会ったことによって、野宿している人々の生活を具体的に想像できるようになった。今、われわれと同じ時代を生きている、同じ生活者だということを強く感じた。不安定な時代が来て、今そのことを私たちは思い知らされている。神戸 YWCA の中で、着実に続けられてきた「夜回り準備会」の活動のおかげで、私はこんな貴重な体験をさせてもらうことができた。

これを機に、活動にもっと関心を持ち、見守っていきいたいと思う。



2-3 夜中回りを振り返る

中村 祥規

2009 年 4 月 25 日を最後に、私たちは、2007 年 6 月から約 2 年間実施してきた「夜中回り」を休止することにしました。夜中回りは、通常の「夜回り」とは別に、終電が出発した後の駅周辺などで寝ている人を対象に行なってきた訪問活動です。当初は不定期に行なっていた活動でしたが、やがて、月 1 回、第 4 土曜日の夜回りの後に実施するようになりました。午前 1 時前に出発、午前 2 時 30 分から 3 時くらいに帰着し、午前 4 時ごろに解散、というのがおおまかな流れでした。休止することになった理由はいくつかあるのですが、やはり、参加者の体力

的な負担の重さが一番大きかったように思います。

夜中回りで出会った人は、小屋・テントなどを持たず、身一つで野宿生活を送っている人たちでした。中には、ごく最近、家を失ったばかりという人に出会うこともありました。YWCA のふだんの夜回りで出会っている人の多くは、小屋・テントなど何らかの定住地を持っていて、日雇い労働やアルミ缶集めなどで何らかの現金収入を得ている人がほとんどです。ところが、夜中回りで出会う人は、そのような生活するためのすべを持たず、より困窮の度合いが高い人が多かったように思います。

深夜、人が寝静まった後、ようやく身体を休めているところの人を訪問することについては、かえって迷惑なのではないかという指摘もあり、メンバーの中でも何度か議論がありました。ただ、それでも 2 年間続けることになった背景には、小屋・テントを持っている人に比べて生活に困窮している人が多かったことが挙げられます。温かいものを食べられないということで、持参していたおにぎりやみそ汁を喜んでくれる人が多く、生活保護の申請に繋がるケースも多くありました。ただ、2008 年度の後半あたりからは、新しく出会う人も少なくなっていたのも確かです。

夜中回りで出会った人たちの居場所は、(本人が追い立てに遭わないようにそうしていることもあるのですが) 朝になれば、その人がそこにいた形跡すら分からなくなってしまう。テントを持っている人であれば置き手紙などで連絡しあうこともできますが、テントを持たない人の場合はそれでもできません。より困っている人ほど、そのことが私たちの目には見えにくく、つながりをつくり、適切な支援を行なうことも難しい。夜中回りを休止することになった今、なおさらそのことを痛感します。

一方では、追い立てが厳しくなり、公園などでテントを張るのが難しくなったという最近の傾向があります。このことは、私たちの活動している範囲での実感としてもそうですし、他の地域で活動している人からもよく聞かれる話です。夜中回りで出会った人たちのように、生活の場すら持てず、さらに不安定な生活を強いられている人が増えているのではないかというのが気がかりです。もしそうだと

すれば、小屋・テントへの訪問を中心にしてきたこれまでの私たちの活動のあり方が、あらためて問われているのかもしれませんが。そんなことも考えさせられた、2年間の夜中回りでした。

2-4 「ボランティア」公害？

中村 祥規

「ボランティア」って何？

夜回り準備会の活動はしばしば、「ボランティア」活動と呼ばれる。また、活動している私たちが「ボランティア」と呼ばれることも多い。「有志による報酬を得ない活動」というのはその通りで、それを指して、ボランティア活動の一種であるとするのは間違いではないと思う。だが、自分たちの活動を「ボランティア」と呼んでしまうことで、誤解を招いてしまっているのではと思うこともあり、最近の夜回り準備会では、「ボランティア」という言葉をなるべく使わないようにしている。たとえば、この報告書やホームページなどで新しい参加者を呼びかける際には、「ボランティア募集」とせず「参加者募集」と書くようにしたり、といったふうにある。

「ボランティア」を名乗ることで誤解されていると思うのは、たとえば、夜回りの活動や野宿している人に関心があつて、というよりは、とにかく「ボランティア」がしてみたいという人から、参加の問い合わせを受けたときなどだ。本人からの問い合わせではなく、学校関係者などから「学生にボランティアをさせたいのだが、そちらの活動に参加させてもらえないか」という問い合わせを受けることもある。

困った「ボランティア」

2007年の夏には、ある大学から「ボランティア実習を受け入れてほしい」という問い合わせがあった。その大学では、何らかのボランティア活動に計5日間参加することを、ボランティア実習として必

修単位にしているそうで、そのカリキュラムの一環として学生数名を参加させてほしい、とのことだった。大変そうだから断ろうかという意見もあったものの、参加したいという人を断る理由もないし、興味のある人にはぜひ参加して関心を深めてほしいというのが私たちの基本的なスタンスでもあるので、大学の先生と何度か打ち合わせも行なった上で、私たちは3名の学生を受け入れることにした。

ところが、学生の受け入れが実際に始めると、困ったことになってしまった。オリエンテーションの途中で居眠りをする、無断で欠席をする、一緒に来ている友だちが休むのなら行かない、といったぐあいで、本当に活動に興味があつて来ているとは思えない事態がたびたび続いたのである。結局、その学生たちが夜回りに来たのは、当初の予定のうち2日間だけだった。私たちは成績評価をする立場ではないので、興味のない人には無理に来てもらわなくても全然かまわないのだが、受け入れにあたってはそれなりの用意を——それこそ「ボランティア」で——することになるので、その点では徒労に終わってしまった。

ただ、このことを個々の学生たちの態度、マナーだけの問題にしてしまっているのかといえば、そうでもないという気もする。というのは、こうしたできごとの背景には、「ボランティア」という言葉に、「困っている人を助ける／役に立つ活動」というイメージがあつて、そのイメージとの実際の夜回りの活動との間のギャップが、問題の背景にあるように思うからだ。

「困っている人の役に立ちたい」という気持ちじたいは、決して悪いものではない。ただ、私たちのふだんの生活を振り返っても分かるとおり、人の役に立ちたいといつても、そんなに簡単には行かない場合のほうがほとんどだ（だからこそ、「困っている」のだとも思う）。仕事であれ、家庭であれ、あるいは学校や地域社会のことであれ、自分なりに一所懸命やっている中で、ごくたまにそういう機会にめぐり合う、というのが現実的なところだろう。

しかし、「ボランティア」活動については、そういう常識が必ずしも通用しないようだ。「ボランティア」をすれば必ず、人の役に立つことができて、

それに付随する充実感を得られるという、ちょっとおかしな誤解がまかり通っているように思う。また、このケースに限らず、学校関係者から「学生にボランティアをさせたい」という問い合わせを受けることも多い。「ボランティア」活動をすることで、「人の役に立つ→感謝される→嬉しい！→もっとがんばろう」というサイクルが生まれ、そうした経験することが学生の人格形成上好ましいという考え方があるのだろうと思う。

ところが、私たちの活動の「夜回り」の部分というのは、ふだんはとても地味なものだ。一見すれば、お茶を淹れたりしながら少しの間立ち話をするというだけの活動にも感じられるかもしれない。その間に、まずは安否確認から、医療・生活保護などの相談ごと、仕事のことも聞いたりする。これが夜回りの大きな目的だが、一度の参加だけではなかなか分かりにくいところでもある。おにぎりや蚊取り線香、使い捨てカイロなどを届けたりもしているが、生活に必要な量からすれば、気休め程度のものである。夜回りをしたからといって、人の役に立ってよかったという充実感をその場で味わえるわけではない（もちろん、長く活動に関わっているなかで、そういう経験をすることはあるし、それはとても嬉しいことなのだが）。はじめて参加した人の場合は、カゴやポットを持ってほかのメンバーについていくだけ、という形になることがほとんどなので、なおさらだろう。活動に参加して何かしらの達成感を得たいと思っていた人にとっては、期待はずれになってしまうことが多いだろうと思う。その点から言えば、大学のカリキュラムとしてのボランティア実習で、夜回りに来ることじたい、ミスマッチだったのかもしれない。

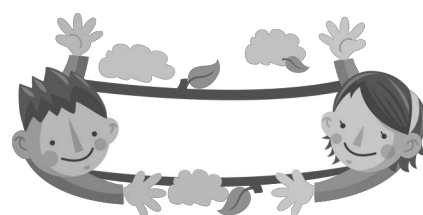
どこまで、どのように受け入れるか。

また、「ボランティア」団体というと、「ボランティア」をたくさん必要としている、「ボランティア」を派遣すれば喜ばれるはず、といった誤解に直面することもしばしばある。上記のケースとは別の大学からは、「学生たちがさまざまなボランティアに参加できるプログラムを実施している。ついては、学生の受け入れをお願いしたい」といった申し入れを

受けたこともあった。学生が気軽にいろんなボランティアの経験をできるようにしたいというのがプログラムの趣旨だったようだが、ほかにもいろんな分野の活動がある中で、なぜ夜回りに参加したい／させたいのかという点については、はっきりとした考えを聞くことはできなかった。また、受け入れにあたって、私たちの負担も大きく「学生が参加すればそちらにも利益があるはず」という一方的な態度だったこともあって、このケースでは、受け入れをお断りすることになった。

もちろん、関心のある人に来てほしい、多くの人に関心を持ってほしいというのは、メンバーの誰もが共有している考えである。関心といっても最初は些細なものであるのがふつうだし、活動に参加していく中で、野宿している人や野宿の問題全般についての考えが変化したり、深まったりしていくこともごく自然なことだと思う。その点では、活動に触れるきっかけがたくさんあることは好ましいことだ。実際、これまでも、ボランティア講座などの組織的な受け入れをきっかけに、会の活動に積極的に関わるようになったメンバーも多くいた。そういった意味では、「ボランティア」の受け入れに消極的であることは、活動に携わるきっかけを狭めてしまうというジレンマを抱えているのも確かだ。そういう形で問題にかかわる間口が狭くなってしまうのは、残念だとも思う。

とはいえ、上記のようなできごとがたび重なると、無制限にそれらを受け入れていくことは、実際には困難だ。また、訪問先である野宿している人に対しても、かえって迷惑をかけてしまうのではないかという懸念もある。そうした中で、自分たちの活動をどのように説明していくのか、どんな形で呼びかけていくのかが今、問われているのかもしれない。「ボランティア」という言葉を用いるのかというのも、そうした問題のひとつの表れなのだろうと思う。



2-5 「野宿者支援」のなかの「男・女」

鍋谷 美子

2008～09 年の越年炊き出しのとき、セクハラが起こった。というか、それは余りに日常的すぎて、見過ごされてきたことのように思う。そのときや、それまでの活動などの中で体を触られるなど嫌な思いをした何人かの女性メンバーが、そのことを会の他のメンバーに話すと、そこで二次被害が起きた。被害を受け、しんどい思いをしたという声をさえぎり、曰く「男というものは・・・」「親密さの表現だよ」などなど。飲み会の席だったということもあったが、そこでも嫌な思いをした私を含むメンバーは、安心して活動ができない思いに愕然とした。

これまでにセクハラ(相手の意思に反して体を触ったりすること以外に、性的に不安や不快な言葉をかけることもさしています)がなかったわけではない。特に、野宿の現場は支援する人も含め、(野宿の現場だけでなく、社会運動全体の傾向かもしれないが)圧倒的に男性が多い。野宿している人のほとんどは家族と離れた、単身者だ。世代を見ても、50～60 代以上が大多数。それにはどれも理由があるし、女性は野宿すらするのがむづかしいというのが実情で、女性野宿者はごく少ない。野宿の現場では、日常起こっていることが、ごく見えやすい形で現れている、といえるかもしれない。

でも一つ気づいたことがある。これまで現場でセクハラが起こっていたときに、そのことをセクハラだと気づいている人が介入し、言葉をかけたりフォローしたりしながら、その被害当事者を守ろうとしていたということだ。私も守られた経験を持つ。それによって、不安をやわらげて活動できていたように思う。しかしそれは同時に、問題が表面化せずに、セクハラがあったことにさえ気づかない人とも、そのまま一緒に活動を続けているということにもなる。

今回、炊き出しのときには、セクハラを受けた当

事者(私)は一人でいたわけではなかった。何人かで談笑していた中で、ふいに親しかった元野宿の男性から体を触られたのだ。途端に私は言葉で猛然と抗議し、始め「冗談やってー」と笑っていた相手も最後には悪いことをしたと分かったようで神妙に謝った。しかし談笑の輪にいた他の男性は、そこに介入することもなく、その輪の周りにいた人たちも、何が起こったのか分からないようだった。私はいたたまれなくなつてその場を離れてから、誰に、どのように、今起こった酷いことを伝えていいのか、むしろ「誰かに伝えてもいいのか？」と不安で、頭がぐちゃぐちゃに混乱していた。

その後、たまたま神戸外から炊き出しに来ていた友人に伝え、そこから夜回りのメンバーに話をすることができた。友人に話している間中、涙が止まらなかった。それで、その日の夜に Y の夜回りの新年会を兼ねて集まる場があったので、その場で共有したい旨を何人かに伝えた。その場自体が前述の通り、二次被害を引き起こす場になってしまったわけだが…。

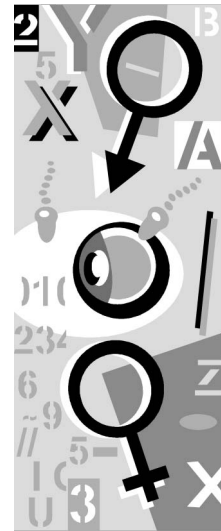
この話は終わった話ではない。その後も Y の夜回りの中で、神戸の越冬実行委員会の中で、経緯と想ったことなどの文章をつくり、なげかけた。反応はさまざま。男性・女性とことさらに分けたくはないが、やはり男性より女性の方からしつかり反応が返ってくるが多かった。男性は、私にどう接したらいいのか分からないという反応が多かったように思う。そして、介入できなかつたり、後で起こったことを聞いた男性たちの反応の中に、「鍋谷なら大丈夫だと思った」というものがあった。私はその場で相手にしつかり言葉で抗議していた。そのこと自体すごくしんどいことではあったが、抗議できたことは私自身も良かったと思う。でもそれを見て、大丈夫だと思われるのは心外だった。もしそういうことが起こったときには、しつかり介入して欲しい、どう介入して良いか分からなければ、起こっていることを他の信頼できる人に伝えて欲しいということ、を、いちいちすべての人に伝えた。

例えば野宿している人のところに夜回りに行く

とき、一緒に炊き出しをつくるとき、「女の子がそんなところに行って、危なくないの」と言われることは多々ある。そこには二重の偏見が含まれている。今回も、「夜回りに行くとき、女の子たちだけでは何かされたときに危ないから、後ろから睨みをきかせるのが（男の）役割やと思ってる」ということを言う男性がいた。何かされる危険。それは女である以上避けられないのか。それでは、男であるあなたからも私たちは身を守らなければならないのだろうか？それがことさら野宿している人だから危ないと言うのなら、それこそものすごい偏見ではないか。

夜回りで嫌な思いをすることはある（私個人としてはこれまでほとんどなかったが）。しかし、電車の中で、夜道で、本屋で、マンションの入り口で、昼間であろうが、日常的にも性的に嫌な思いをすることはいくらでもある。好むと好まざるとに関わらず、男性とみなされる／女性とみなされる、ということだけで、この世界で生きていく安心感は全く違うものになる。そのことを皆が前提として確認したうえで、活動できればいいと思う。野宿の問題自体にも、ジェンダー要素が色濃くからんでいる。YWCAでやっている夜回りだからこそ、そのことも考えていけたらいい。

「野宿したくない人が野宿しなくていいように／野宿している人の人権が損なわれないように」は、夜回りのスローガンだが、女性女性である（とみなされる）ということで、人権が損なわれるという状況は未だもって変わっていない。夜回り自体、する必要がなくなれば一番いいのだが、今は夜回りなどで嫌な思いをしたときに、みんなで共有し、どうしたらいいか考えられる、そういうグループでありたいと思う。この問題は、これまでもつねにそこにあり、でも、いつでも、気づかれたばかりなのだ。



第3章 活動の中で出会った人々

3-1 真弓さん聞き取り

藤原 史行・野々村 耀

真弓さんは大手食品メーカーや保険業界で働いていましたが、業界再編の影響で失職し、ガレージで暮らすようになり、野宿生活も経験しました。現在はスーパーに勤務し、アパートに住んでいます。失職後に食をつなぐためにした粗ゴミ集めの話や、入院・退院・生活保護、そして、就労した勤務先の残業 200 時間を超える過労の話、野宿生活を経験して思ったことなど聞きました。

野宿になるまでの生活

バブルまで

生まれたのは播州赤穂。生まれてすぐに西宮に引っ越しまして幼稚園まで過ごして、加古川に引っ越して加古川で小学校五年生までいて、小学校六年生で神戸の東灘区に引っ越してきたんです。生まれたのは 1956 年です。神戸で 24 歳くらいまでいたのかな。

19 歳から紀文という会社に勤めたんです。紀文に 15 年くらいおったんですけど、係長になる寸前で体調を崩して辞めまして、ほんで、保険業界に入ったんです。生命保険の勧誘です。セゾン生命保険というアメリカの外資の会社に入って、ちょうど紀文を辞める時に結婚して、かみさんが保険会社の人間やったんで転職するなら保険会社のほうが楽やろうということで入ったんですよ。紀文では百貨店の店長、売り場主任や車に乗っての営業活動、そんな仕事をしていました。保険会社では代理店ではなく社員でやっていました。バブルの最後のほうやったんで、結構成績よかったんで年収 1000 万くらいまでなりまして、いい思いもしました。

震災 ―脱サラ、業界再編で失職、離婚―

辞めることになったのは震災で神戸事務所がつぶれてしまって、撤退するということになったんですよ。(セゾン生命保険勤務当時)私は一緒に生命保険をやりながら損害保険もやってたんですよ、三井海上の。それで、私がそれ(神戸事務所の撤退・移転)についていけないという状態だったんで、今度は三井海上の代理店として自分で商売を始めたんですよ。

震災の時の被害は家が西宮にあったんですけど、子どもとかみさんとで、家が半壊の状態になりました。さほど怪我もなくすんだんですけどね。そこに住んで、代理店も始めたんですけども、平成 11 年ぐらいに金融の再編っていうのがちょうどあったんですね。銀行が倒産したりとか、保険会社が倒産したりとか、そういう時期だったんですよ。それで、合併統合というのがものすごくあって、三井と住友が合併することになってね、三井住友海上というのができたんですけど、その時の住友の条件が、小さな代理店は切ってくれ、ということやったんです。それで、うちは切られてしまったんです。仕事がなくなしまって、かみさんともそれで離婚したんです。

それからですよ、苦勞の始まりは。西宮に住んでいたけど、離婚して住まいも何もかも失ってしまって。1000 万円の生活からゼロ円の生活になってしまって、それがやっぱり精神的にショックが大きくて、閉じこもり状態になってしまった。そこを引き払って深江の親元のところに移ったんです。実家が建築業をやってて寮を持ってましたんで、その寮にとりあえず仮住まいしようということだったんですけど、住んでいても仕事はないし食べれないし、困った。

その時精神状態がおかしくなっていたんですよ。それで自殺を図ろうとして自殺未遂を犯したんですけど、それがばれまして、警察沙汰になって、警察に保護されたりとか、いろいろトラブルがありました。

た。家にいても親から仕事せい仕事せいと言われるんですけど、そのころ、私は保険の仕事しかできないと思っていたんですね。フランスで日本食のレストランをするから手伝ってくれという話もあったけど立ち消えになってしまいました。それで、日本生命に就職したんですけど、ノルマがきつくて続かなかったんですよ。その頃はもうバブルも終わってたし、保険も取れない時期で、給料も10万前後しかなかったんで、すぐやめちゃって、また家にこもるようになって、親からのプレッシャーもきつかったですし、家におってもあれなんで、夜に徘徊するようになったんです。

実家のガレージ暮らしと粗ゴミ集め

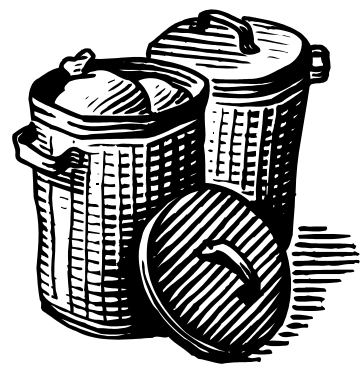
ある日、夜に徘徊して家へ帰ろうとしたら、帰れなくなっちゃったんですよ。鍵をかけられて。そこから、ホームレスの始まりなんです。(家に)シャッター付きのガレージがあったんですけど(その)車の中で寝泊まりしてたんですよ。そこもだんだん居づらくなっちゃって、追い出されるように外で寝るようになって。でも、食べるものがないですよ、ガレージ。はじめのうちは本当にお腹がすいてね、よそになってる木のミカン食べたりね。しめ縄のミカンをね、罰あたりですけど食べたりね。変な話やけどね、落ちてるもんを食べたこともありますわ。

そないしてるうちに、粗ゴミっていうのを覚えたんですね。誰かに習ったんじゃなく、たまたま夜歩いていたら、本を5、6冊拾ったんですよ。うちの子供が古本を売っていたのを思い出して、本を売りに西宮まで歩いて売りに行ったんですよ。その当時、西宮しか(古本屋さんを)知らなかったの。その時に売ったお金が240円だったんですよ。240円ですぐにパンと牛乳を買ったんです。それで食べて、そうや、これで本を売ってお金にしようと思って粗ゴミをずうっと回るようになって本ばかり集めてたんです。他のもの、電化製品は知らなかったんです。電化製品があっても手をつけずに本だけやってたんです。そのころは本がいっぱい捨ててあったんで、古本を集めて来て一回に売る量が200冊から300冊くらい。このころは東灘に古本市場ができたんでそこに売りに行ったんです。売りに行っ

ては2000円にしたり、3000円にしたりひどい時は500円とかね。ガレージに本を無茶苦茶集めてたんです。

ところがね、隣のガレージの人が変に思いだしたんですね。この人ここで寝泊まりしてるな、いつもおるなって。だんだん居づらくなってきたんです。ガレージは電気もあれば水道もあるからよかったんですけどね。でもだんだんおりづらい環境になってきたんで。

本を集めてばっかりしてたら、ホームレスの人が電化製品のことを教えてくれたんですよ。その人はたまたまコンポを探しに来ていて、私は本を拾いに来て、私がここにスピーカーあるでって教えてあげたんですよ。それから、何回か会うようになってきて、話をするようになったんですよ。その人がラジカセやったらなんぼで、こんなやつたらなんぼで売れるんやでって、ほんで、どこに売りに行くんやって聞いたら、軽ワゴンで買いに来るはるみちゃんって人に売ったらええねんって教えてもらったんです。当時はラジカセ売って2500円くらいでこれは大きいなって。本とラジカセとか電化製品、両方を集めに行くようになりました。そうしたら、悪くても一日2000円、3000円にはなってたんでなんとか食っていけました。



野宿になってからの生活

東灘での野宿生活

わたしね、野宿っていうのはあんまりないんですよ。(東灘のテントに住んでいた)上村さんに会って、うち来んか、って言われて、出入りするよう

なって。ガレージと上村さんのところを行き来して
たんですけど、上村さんが問題起こしてテント出て
行ったんですね。喧嘩しよったんですよ。酒飲んで
木刀でどつきよったんですよ。ほんで居づらくなっ
てあわてて逃げるように出ていったんですよ。その
後がまに僕が入ったんですよ。最初は泊めてもらっ
たりとか。はっきり泊まるようになったのは上村さ
んが出て行ってから。ほんまに公園とかで寝泊まり
とか、そういうのはあんまり経験ないんですよ。そ
ら、拾いに行った先で一晩泊まるとかいうのはあり
ましたよ。朝ゴミが出るから前の晩から泊まったり
とか。上村さんの後に入ってから仕事は電化製品
一本でした。ラジカセ、コンポ、ミシン、テレビ、
編み機、あと、小物で貴金属とか時計とか。六甲ア
일랜드が一番の稼ぎ場所でした。一日で多い日や
ったら2万くらい稼ぎました。

入院

新品のプリペード式の携帯を拾ったんですよ。使
えるように登録して、私もプリペード式の携帯持っ
てたんで同じ仲間に一台やったんですね。自分では
(集めた電化製品を)運びきれへん時に応援を呼ぶ
のに使ってたんですよ。あれはちょっとラッキーで
すよね。しばらくやってるうちに病気になったん
ですよ。ダイエーで倒れたんですよ。ダイエーのトイ
レで動けなくなって(一緒に住んでいた)星ちゃん
を電話で呼んだんですよ。それでテントまで一応帰
ったんです。帰ったけど調子悪いんですよ、すっご
い。星ちゃんが心配して救急車呼んだんです。夜中
運ばれたのがH病院。診察を受けたんですけど、
お金持っていないし、どないして診察代払おかな
って思ってたんですけど、夜間診察ではよくわから
ないと、昼間来てくれって言われたんですけど、昼
間行ったらお金ないし星ちゃんと雨の中逃げよう
に歩いて帰ってきたんですよ。ほんで星ちゃんが
野々村さんに電話したんですよ。それで、野々村
さんが来てくれはって病院行こうってなったん
ですよ。お金のことが心配やったし調べられるの
が嫌やったんですけど、結局、それからN病院へ
行って半年ほど入院したんですかね。大腸の中
でポリープが破けて出血したんです。手術をして、
そこを縫っ

て、2回ね。病院で寝てたら今度は胃潰瘍になっ
て、3ヵ月ぐらいで退院する予定が半年になっ
ちゃったんです。

生活保護から就労

それから生活保護で家借りてもらって、生活保
護を受けながら毎日悶々と生活してたんです。初
めの方は、体力がなく買い物に行くのも大変で
した。ちゃんとした仕事ではないですけどリサイ
クル屋さんの手伝いをしたりしてました。でも、
ケースワーカーの人からさんざん仕事をしなさい
って言われるんですよ。それで、職安に通って
仕事を探しました。たまたまスーパーが人を募
集してたんで、面接に行ったところ一発OKにな
ってそれから働くようになったんです。2004年
の8月から勤務し始めました。体調に不安があ
り、生活保護が切られてから病気になると医療
費を払えるか心配なので生活保護が切られない
ように、1日5時間程度の契約で働くように
なったんです。月に換算したら6、7万、とい
うことでやってたんですけど、働いているうち
にどんどん長くなってきたんですよ。向こう
からもっとやってくれ、6時間が7時間にな
って、8時間になって、実際にはもっと働か
ないかんように追い込まれて1日15時間働
くようになって。1ヵ月で残業が200時間。
時給780円やったんですけど手取りで25万
超えちゃったんですよ。それで生活保護が廃
止になっちゃったんです。

過労で再び療養生活

待遇はよくないけど責任は大きい仕事やっ
たんです。パートのリーダーとして責任者
としてやってたんです。だから、パート
さんの取りまとめとか、業者が来た
ら商談もやって、何もかも全部自分
で、準社員としてやってたんですよ。
ところがあまりにも時間が朝から晩
まで長いんで。余りきついで同僚が
ドンドンやめるので、残った者はま
すますきつくなった。やめようと思
ったが、2005年の7月に労働条件
が改善されるというので辞めずに
残りました。朝の7時から、下手
したら6時から晩は17時までであ
ったんで(タイガースが優勝した頃
は、朝6時から深夜の1時まで働
きました)ストレスと過

労がたまって体の調子が悪くなって、動悸と呼吸ができなくなって R 病院に行って調べてもらったんですけど、どこも異常がない、心臓も悪くない、と言われた。このままじゃ、体が持たないということでそのスーパーを辞めると言ったんです。辞めないでくれと言われましたが、強引に辞めました。パートさん同士の揉め事が非常に重くてそんなの仲裁に入ったり、仕事は多いしそういう揉め事はいっぱいあるし、上司にも相談したんですけど、その上司も屁みたいなやつで全然話にならなかったんですよ。結局、全部責任がのしかかってきて、ストレス溜まりまくりで体を悪くして、R 病院じゃわからないので(以前お世話になっていた)ケースワーカーに相談したら、「心療内科に行ってみたほうがいい」と言われました。紹介してもらい行ったら、パニック症、うつ病と診断されて、また生活保護を受け療養生活が始まったんです。2 年くらい病院に通ってます。パニック症の方は軽かったんで案外早く治ったんですけど、うつ病の方が長引いています。働けない状態ではないんで、働くところを探そうという状態やったんです。御影のスーパーの募集があって受けてそこに入ったんですけど 1 年半で閉鎖になっちゃって、仕事がなくなりました。今は違うスーパーで同じような仕事をしています。今も 1 週間に 1 回病院に行っています。でも、今はとりあえず働けるところがあって、毎日希望にあふれた生活を送っていますよ。



野宿生活を振り返って

前向きに暮らそうと思った

でも、ホームレスになったっていうのは、どん底を味わったのはいい経験になったと思いますよ。ホームレスになってるときは俺は絶対にここから脱出したろうと思ってましたもん。だから、今日より明日、明日より明後日、いい生活を、前向きの生活をしようという風にずっと考えていました。ホームレスになっても社会とのかかわり合いを絶対に持っていこうと思って必ず月一回は三宮のビジネスホテルに泊まりに行ったんです。そこでお風呂入って、きれいにして、気分新たになりますやん。自分も気分的に、どう言えばいいかな、ホームレスじゃないっていう精神状態にもっていくようにしてたんですよ。

東灘で野宿してたころは仕事は何でもやりました。ポスティング、リサイクル屋さんの古道具買い受けの営業活動、それに「市」に買い付けにも一緒に行きました。今はその店の商品を私がインターネットでオークションに出してるんです。この前は 2 万 4 千円くらいで売れたんです。電化製品を売りに大久保まで自転車で行ったりしたこともあります。中華料理屋で働いていたこともあります、コックで。(調理の仕事は) したことはなかったんですけど、働くために嘘ついたんですよ。できますかって聞かれてできますって言うて入ったんです。はじめは味付け忘れて、お客さん食べたら味付いてへんでって言われたりね。東灘に行く前に明石の方において、明石にスーパーのサティがあるでしょ。そこの中の中華料理屋で、何か仕事しなあかんと思ってそこで働いていたんですけど、1 ヶ月 8 万円くらいしかなくて、家を借りる敷金ができなくて。あの辺は意外に高いんですよ。田舎やのに高い。それで神戸帰ってきて。

生活保護は女性が受けるものやと思った

生活保護って知らなくて、あれは女性が受けるものやと思ったんですよ。男は受けれないと思ってたんですよ。あの時に野々村さんに会って教えてもらったから、こないしておれるんで。制度を知らなく

て何人の人が命を絶ってるかと思います。そういうニュースとか見たら心を痛めますね。もし知らなかったら今頃死んでますよ。自分で自殺してるか、飢え死にしてるか、どっちかやろね。

自分の人生においてどん底の生活をしたけど、自分にはプラスになったなと。苦痛でしたけど、でも経験したからいろんなことを覚えたし、いろんなことを人にも教えてあげることができるし。何人か生活保護を紹介してあげて手続きも行ってもらいましたし。

夜回りは私らは2週間に一度でも来てもらったから、うれしかったですよ。来てもらってちょっとでも話ができる、仲間以外に話ができるって言うのがうれしかったですよ。やっぱり、ホームレスってのは閉鎖的な社会ですから、仲間との結束はつよいんです。でも、それ以外の交流ってのはないから、うれしかったですね。

野宿生活で気づいたこと

変な話ですけど乞食三日したら辞められへんって言いますけどホンマの話ですね。ホームレスになってこんな楽な生活があるんやなと思いました。社会とのかかわり合いが一切なくなるでしょ。自分一人になっていろいろ考えるんです。電気代払わんでええ、家賃払わんでええ、水道代払わんでええ。儲かったお金はみんな自分の好きなように飲み食いできる。(吹きさらしでなく適当な小屋をもていけるなら)好きな時に仕事ができ、食べられるだけ稼げばいい。

西明石駅前で真冬の寒い日に吹きさらしで一晩過ごしたことがあるんです。あの時ほどみじめな思いしたことがないですね。今まで生まれてから三十何年間かは一流会社におってずっと金看板背負ってずっと歩いてきたんですね。それでプライドって言うのがものすごいあったんですよ。紀文っていう大きな食品会社に入って、三井海上、セゾングループとかで金看板背負って仕事して来てますから、しがらみがすごかったんです。人間って金持ってるときって人がいっぱい来るんですね。人の付き合いが多いんです。ところが、金がなくなったらいつぺんに人がいなくなっちゃうんですよ。(素の人間と付

き合ってるわけではなく向こうもこちらも会社の看板として付き合っているところもあることが)はじめのうちはわからないんです。

ホームレスになって何が良かったかっていうたら、そういうしがらみが全部なくなって自分のプライドを全部捨ててれたっていうのがね、よかった。精神的に楽になったっていうか、身軽に感じてこんなにええ生活はないなって感じました。(ホームレスになる前はそれが当たり前だと思っているから気付かないが)社会的な地位とか言うのがありましたから、そういう重圧を受けながら生活をして来て、年収1000万の生活でやってきて、いきなりそれがゼロになって、でもゼロの生活にできないんですよ、いきなりはね。でも、ホームレスになった瞬間に何もかも捨てて、社会からも孤立して自分の世界を作っているからホンマに身軽になりました。だから、一からやり直しがきく。ホームレスになる前は未練はあったけど、今は自分の過去に未練はないですよ。だから、いまは幸せですよ。仕事もできて三食ご飯も食べれて家でちゃんと布団で寝れて、やっぱりこれが一番の幸せやと思います。その代り、電気代ガス代水道代払ってますけど。



3-2 小林さんに教えてもらった

レシピ

野々村 耀

本当は、聞き書きではないのですが、小林楊一さんの遺書のようなものが残っています。

小林さんとは、中井病院で出会いました。誰かに紹介されたのだと思いますが、今は覚えていません。

はじめて会ったときには、退院後アパートを借りて、生活保護を受ければよいから、安心して治療しようなどと話し会いました。小林さんも、そうしたということでした。

ところが、次の週に訪問すると、「部屋はもう要らない」、といわれ、びっくりしました。「どうしてですか？」と聞くと、医者「ガンだから、もう長くない」といわれた、「自分には退院後はない」とのこと。

何を話してよいかわからなかった。が、食べ物関係の仕事をしてこられたということなので、調子が

良くなったら、一度小林さんの作ったご馳走を食べたいという話をした。

料理の話になると、愉しそうなので、毎回いろいろな料理の作り方を聞いた。僕も料理するのは好きなので、弟子にしてみようことになった。

時々、役所に対する不満、自分にはわからない手続きのことなどを話すときは、機嫌の悪いこともあったが、料理のことについては自信があり、秘伝の「何にでも使える素」があるのだと、手帳を破った紙に書いてくれた。

訪問するたびに、小さな紙にかいたその「素」を使ったレシピを渡してくれた。分量や材料を思い出しながら、書いてもらったレシピは今もとってある。

最後には、アメリカに貸してある金を受け取りにいくなどと、話が理解しがたくなり、小林さんはいなくなった。手元にある小林さんのレシピは僕の宝のひとつになった。



小林楊一さんの和風だし 和食の素

醤油	300cc	酒	300cc	味醂	200cc
鰹節	20g	こぶ	20cm		

一煮たちしたら 中～弱火で 15～20 分、2/3 になるまで煮詰める。
ゆっくり冷めるまでまち、漉して保存する。冷蔵庫で 60 日は持つ。

酢豚

豚ロース 100g ゆでタケノコ 50g 人参 50g 玉ねぎ 50g ピーマン 2 個
片栗粉 小さじ1 下味和食の素 小さじ1 サラダ油 適量
合わせ調味料（和食の素 大さじ2・酢 大さじ2・ケチャップ 大さじ2
・水とき片栗粉 小さじ1・長ネギ 適量）

- ① 合わせ調味料を混ぜておく。
- ② 豚は和食の素で下味をつけ、片栗粉をまぶす
- ③ タケノコ人参は、小さく乱切りにし、タマネギは一口大に、ピーマンはへたと種をとり、一口大に。
- ④ フライパンにサラダ油大さじ1をよく熱して③の野菜を炒め、いったん取り出す。
- ⑤ ④のフライパンに、サラダ油大さじ2杯を熱し、②の豚肉を焼くように炒める。火が通ったら、④の野菜を戻し入れる。
- ⑥ ⑤に合わせ調味料を加えてよくかき混ぜる。水とき片栗粉でとろみをつけ、長ネギをあしらう。

レバニラいため（2 人分）

生レバー 150g ニラ 2 分の1 束 細葱 1 本 しょうが ひとかけ
ニンニク ひとかけ 小麦粉 適量 和食の素 大さじ2 サラダ油 適量
胡麻油 適量 白ゴマ 適量 一味唐辛子 適量

- ① レバーを適当な大きさに切り、塩少々でもみ、水洗いする。ニラは5センチにきる。葱は斜め薄切り、しょうがニンニクはみじん切り。
- ② ①のレバーに小麦粉を薄くまぶし、フライパンを熱し、サラダ油をしいて、レバーを焼き、フライパンから取り出す。
- ③ 再びフライパンにサラダ油を注ぎ、ネギしょうがにんにくを入れ、火をつけ、いい香りがしてきたら、②のレバーを戻す。少ししてニラを入れ、しんなりしたら、和食の素を加え、全体にからませてから、仕上げにごま油を数滴たらし香り付けをして火を止め、皿に盛りつける。
好みで白ゴマ、一味を降りかける。

親子煮（2人分）

鶏手羽元 6本 卵 2個 和食の素 150cc 水 450cc
細葱 2本 七味唐辛子 適量

- ① 卵は13分茹で、殻を剥く。手羽元も、熱湯に落とし表面が白くなったら冷水にとり、血合いなどを掃除して、水気を切る。細葱は小口切り。
- ② 鍋に和食の素と水を入れ、火にかけて、手羽元とゆで卵も入れ、あくを丁寧に取り除きながらここと中火で20-25分煮る。
- ③ 器に盛り、細葱をあしらい、七味をかける。

註：手羽元は必ず湯通しすること。味が落ちるぞ。味は保証つき。

カツ丼（1人前）

とんかつ 1枚（市販のものでよい） 卵 2個 玉葱 4分の1個
三つ葉 4分の1束 ご飯 丼1杯 和食の素 30cc 水 150cc
粉山椒 適量

- ① とんかつは2cm幅にきる。玉葱は7mm三つ葉は1.5cm幅。卵は溶いておく。
- ② 鍋に和食の素、水を入れ、火にかける。煮立ったら、玉葱をいれ、しんなりしたらとんかつを入れて煮汁をかけながら煮る。
- ③ 1-2分たったら、三つ葉、卵を静かに流し入れる。蓋をして火を止め、余熱で半熟にさせたらご飯の上にかけて、好みに粉山椒をかける。

市販のとんかつでもこの味が出せる。親子丼なら鳥もも肉100gでOK

豚キムチ鍋

豚バラ薄切り 200g 白菜キムチ 100g 木綿豆腐 2分の1丁 細葱 適量
卵 2個 鍋だし（和食の素 60cc・水 420cc） 一味トウガラシ 適量

- ① 豚肉キムチ、豆腐は食べやすい様に切る。ネギは斜め薄切り。
- ② 鍋に、豚肉、キムチ、豆腐、和食の素、水を入れ、中火にかける。煮立ってきたら豚肉を箸でほぐしながら、火を通す。
- ③ 豚肉に火が通り、豆腐が温まってきたら、細ねぎを加え、卵を落とし、軽く煮る。仕上げに好みに一味唐辛子を入れる。

チャーハン（2人前）

温かい飯 茶碗 2 杯 卵 2 個 茗荷 4 個 生姜 ひとかけ 長ネギ 1 本
縮緬雑魚 45g 和食の素 大さじ 5 白胡麻 大さじ 2 七味唐辛子 適量
サラダ油 適量

- ① 卵を溶く。茗荷 3 個をみじん切り、一個は小口から薄切り。生姜はみじん切り、長ネギは小口切り。
- ② フライパンを強火にかけ、サラダ油を熱し、とき卵を入れてかき混ぜる。卵が固まりかけたらご飯を加え、ほぐしながら炒める。
- ③ ②のご飯がよくほぐれたら、ちりめんじゃこ、みじん切り生姜と茗荷を加えさらに炒める。
- ④ 火が通ったら、和食の素をくわえ、長ネギ、白胡麻を加えて良く炒める。器に盛り、薄切りの茗荷を乗せ、七味をかけて仕上げる。おかずがなくても、これ一品でOK。

きんぴら牛蒡（2人分）

ささがき牛蒡 100g（市販品で可） するめ 6g にんじん 10g
こんにゃく 5分の1枚 赤唐辛子 適量 和食の素 大さじ 1.5
サラダ油 大さじ 2 白胡麻 適量

- ① 牛蒡はささがきにし、水にさらす。するめは食べやすい大きさに切る。にんじんは千切りにし、こんにゃくは2mmの棒状に切る。
- ② フライパンにサラダ油と輪切りにした赤唐辛子を熱しこんにゃくをいれ表面にぶつぶつと穴が開いたら、するめを入れ、するめが油を吸って透明感が出たら、牛蒡を加える。牛蒡がしんなりしたら、和食の素を回しかけ、手早く混ぜる。
- ③ 仕上げに胡麻をふる。こんにゃくは臭みを取るため湯通しするとよい。



第4章 活動外でのできごと

4-1 反貧困キャラバン報告

山本 かえ子・今西 裕哉

反貧困全国 2008 キャラバン「人間らしい生活と労働の保障を求めて、つながろう」は、急速に格差と貧困が拡大しているなか、安心して働ける社会、生きることが保障される社会を目指して、「反貧困」のネットワークをつくるため展開された、生活保護問題全国会議主催の全国キャラバンです。2008 年 7 月 12 日に北九州市、13 日には埼玉県三郷市を出発し、西日本ルート・東日本ルートに別れて同年 10 月 19 日まで「反貧困」を訴えて全都道府県をキャラバンしました。

キャラバンが兵庫県を通過する 2008 年 9 月 25 日～28 日の 4 日間に、兵庫でも何かやろうということで、NPO 法人神戸の冬を支える会を中心とした「反貧困キャラバン 2008 in 兵庫実行委員会」が結成され、神戸 YWCA 夜回り準備会（以下、「Y の夜回り」と略す）も協力団体として実行委員会に参加しました。期間中、街頭キャラバン、各地の福祉事務所訪問、法律家を中心とした無料電話相談会、集会とライブを行いました。

4 日間で広い兵庫県をすべて回るのには限界があります。それでも、「兵庫」とうたったキャラバン活動なのだから、これを機に、普段活動を行っている阪神エリアや、尼崎・姫路や加古川といった瀬戸内に面した都市だけでなく、但馬地域や淡路地域にも足を伸ばそうといった提案が、実行委員会のなかで出されました。そこで、2 日目の 9 月 26 日は姫路・加古川へのキャラバン活動と同時並行で、“別働隊”として淡路島の淡路市、洲本市、南あわじ市の社会福祉事務所訪問を行い、3 日目の 9 月 27 日に豊岡市で街頭キャラバン活動を行うことに決まりました。

メンバーの山本が淡路島出身だったこともあり、Y の夜回りが淡路島訪問の担当になりました。当日

は山本の他、野々村と今西の 3 名が参加し、神戸の冬を支える会事務局長の青木さんの運転で、生活と健康を守る会の山崎さんも加わってくれました。事前に地元の弁護士・司法書士の方々の参加も呼びかけたところ、洲本市在住の司法書士である寿圓さんが、仕事の合間をぬって淡路市の訪問に駆けつけてくださいました。

参加したメンバーの感想

今西 裕哉

淡路島にある 3 市を訪れてみて、3 市ともに生活保護に対する姿勢が異なっていたことに驚いた。また、合併という特殊な環境の影響か、社会福祉部の場所がまちまちだった。特に、南あわじ市では分庁（旧町役場）そのものが一つの課になっていた。このことで、庁同士が車で 10 分くらいすべて離れており、課同士の連携ができるのかなど不便なことがあると感じた。

また、移送費についての問題である。淡路島では公共交通機関があまり多くないと聞いた。しかし、病院がそんなに多く近くにあるわけでもない。それにもかかわらず、移送費が出ていない市があったことには驚いた。公共交通機関が少ないということは、タクシーに乗らないといけないということだ。それを生活費から出していくとますます苦しくなるのではないかと思った。

今回、淡路島に行ってみて、市の生活保護の運営部分が少し見えて勉強になった。市町村合併による不便さの部分を垣間見ることができてよかった。

山本 かえ子

まず、市によって、社会福祉部の場所がまちまちだったため、市役所に行っても別の場所を案内されたりと、事前に調べておいた場所と異なったりして、慌てた。特に南あわじ市に至っては、分庁（旧

町役場) そのものが一つの課になっており(例: 緑庁舎→健康福祉部、五色庁舎→教育部 など)、課同士の横の連携とかあるのかな? と疑問に思ってしまった。市町村合併で、淡路市などは5つの町が数年前に合併している。地元の住民、特にお年寄りには窓口がわかりづらいのではないだろうか。

訪問していくなかで関心をもったのは、生活保護の広報についてである。淡路島は田舎なので生活保護の内容はあまり認知されていないと思ったからである。訪問した際、カウンターをそれぞれ見せてもらおうと、生活保護申請用紙・しおり、いずれもカウンターに置いていなかった。当日、他のメンバーから、もっと、市の広報などに載せて制度のことを知ってもらったほうがよいと意見が出ており、そのとおりだと思った。

各市でそれぞれ生活保護のしおりをもらった。淡路市と南あわじ市は、同じ頃に合併して市になったため、しおりは、レイアウトを多少変えてはいるが、元々兵庫県で使用されていた内容をそのまま引用しているようであった。淡路市は「民生委員との連携」を、しおりの冒頭で書いていた。洲本市は独自のしおりを作成していて、「はじめに」では憲法25条のことなどにも触れる文章で書かれていたものの、中身は他市と同じような内容であった。困って相談に来た人が最初に目にするものであり、どのように書かれているのか、もう少し詳しい検討が必要だと思われる。

例えば、各市でいただいていたしおりには、「余剰の資産、家や土地などを処分してもなお生活できない場合に生活保護制度を」と書かれてある。実際制度の内容でこのように書かれているので、記載に間違いがあるわけではない。淡路のような田舎の場合、昔から住んでいる人が都市部よりも多く、持ち家あり・土地の権利ありの人が多いと思われる。そのような状態の人がこの文章を見たら、「土地家屋をすべて処分しないといけないのか…」と思うだろう(実際、私も最初そう思っていた)。しかし、生活保護の運用によっては、現在住んでいる家や土地(農地など)を保持し、生かしながら生活保護を受けて生活の建て直しを図ることができる。実際はどうなっているのか、柔軟な運用がなされているのだ

ろうか。田舎では、生活保護に対する否定的なイメージが強いといわれている。こちらが質問した際、もう少し突っ込んで聞いてみてもよかった。

民生委員との協力を積極的に行っているという市もあった。淡路島のような田舎は、都市部に比べて人のつながりが強いところが多いため、昔ながらの制度が今でも活きているのであろう。しかし、人のつながりが強いことの裏返しで、困っているのに外聞を恥じて誰にも相談できなくなっている人もいるのではないかと気になった。

生活保護の移送費について、北海道で起きた問題¹の影響で締めつけが厳しくなっているのではないかと思われたため、各市ともメンバーからこの質問が出た。結果、移送費については、各市の対応はまちまちであった。淡路市では出していないということであった。合併して広くなった市内で、保護を受けている人が、みんな病院近くに住んでいるというはずはないだろう。生活費を削って病院に通っているのではないかと思われ、心配である。

どの市においても、雇用が厳しいという状況を教えてもらう。自分も、島を出た一人であるため、心が痛む。生活保護で生活を立て直したとしても、その後の雇用等の状況が厳しいままでは繰り返になってしまう。橋の架橋で四国への“道路”と化してしまったかのような故郷の過疎状況を見て、思わず悲しみを覚えてしまった。



¹ 2006年、北海道滝川市で生活保護を受けた組員が、治療のため北大病院まで介護タクシーで通院するという名目で1回当たり約30万円の移送(交通)費を滝川市から受給した結果、総額約2億円に達し、ほぼ全額が回収不能となった。組員は札幌市内の温泉付豪華マンションに居住しながら通院しており、妻とともに滝川市から支給された金を不動産購入や遊興費、覚醒剤の購入代金に充てていたという。これを理由に、厚労省は移送費を極端に抑制。各方面から批判の声が上がった。

4-2 デモ 3days

～反 G8 現地キャンプ参加報告～

鍋谷 美子

もうすごく昔のことのようだが、2008 年 7 月、北海道は洞爺湖というところで、G8 サミットが行われた。私はそこでのサミット反対運動に、個人として参加した。7 月 7 日から 7 月 9 日まで、3 つあった現地キャンプのうちの豊浦キャンプに滞在し、毎日デモに参加した。

同じくキャンプに参加した（キャンプ地は別の）野々村さんの感想(巻末にあります)にあるように、G8 に反対することは、この社会の貧困をなくしたいという思いと深く関わっている。ともあれ、はじめはほとんど何も知らなかった私は、関西の有志で G8 入門という学習会が始められたので、そこに参加することにした。しかし、そこで一緒に学んで行く予定だった友人が直前に不当逮捕されてしまった。さらに現地で行われる予定のキャンプも準備がすごく大変そうだということや、大阪のテント村からも参加したいが(その逮捕された友人と一緒に行く予定だったが行けなくなり)誰か一緒に行けないかということなど、いくつかの物理的要因があり、とにかく現地に行ってみよう、というのが参加の動機だった。個人的に長居公園のテント村に関わっていたこともあり、現地で「もう一つの（これまでにない可能性のある）村を自分たちでつくろう」という取り組みにもすごく興味があった。

今回の反サミット運動でとられた大きな行動はいくつもあるので、私がここで書くことはほんの一部にしか過ぎないことをまずお断り。私が現地入りしたのは 7 月 5 日。仕事の都合で、夕方飛行機で札幌に着くと、その日札幌であったこの間最大のデモで逮捕者が出たということで、札幌署で抗議行動が取り組まれていた。先に現地入りしていた野々村さんとは会えなかったが、この抗議集団と合流し、通りがかった右翼に罵声をあげられ、逆に追い返す場面などに遭遇しつつ、何人かの友人と再会。

その後、京都や大阪・長居界限で一緒にさまざまな活動を共有していたなかまたちがフェリーで着いたので合流し、ともに宿泊。翌 6 日にアイヌモシリ連絡会の主催するデモに参加してから、現地キャンプへと移った。現地ではこのアイヌモシリ連絡会が主催した伊達キャンプと、G8 サミットを問う連絡会主催の壮瞥キャンプ、豊浦キャンプの 3 箇所あった。一体何人が反 G8 行動に参加するのかが全く読めない中、いくつかのキャンプが準備されたようだった。私は扇町公園の住人 Y さんとともに山谷の野宿のなかまが来る豊浦キャンプに参加することにしていた。ほかのみんなは、めいめい、自分の考えで伊達キャンプ、豊浦キャンプにわかれていた。規模が小さめだという壮瞥には最初誰も行かなかったように思う。その後、3 キャンプ間を移動できればいいかなと思っていたが、それはかなり甘かったということを知る。

着いた豊浦キャンプは、大層な山奥で、そしてなかなか混乱していた。とにかく圧倒的に人手が足りてないようだ。札幌での逮捕の影響もあるのだろう。なんとなく仕切っているっぽい人たちの説明ののち、ごはんをみんなで作って食べ、最初のミーティング。そこからが紛糾と会議に継ぐ会議の始まりだった。G8 サミットは 7 月 7 日から 7 月 9 日までの 3 日間、その間毎日 22km のデモをするというのだ！しかもゴールはサミット会場のウィンザーホテルすら見えない道の駅。会議は泥沼化し、結局初日はおもに日本からの参加者と海外からの参加者に別れて行動することになった。初日は雨だった。日本からの参加者は朝からデモコースを 10km に縮めて歩く。海外勢は午前中話し合いを持ったのち、デモではなく、公共交通でホテルにより近づくことを目指すという行動を昼から行った。ショートデモは達成されたが、海外勢は駅に辿り着く前に公安に阻まれ、雨に濡れて帰ってきた。

結局私たちは決められたデモコースを決められたように歩くしか、選択肢はないのだ、と翌日はほぼ全員が 22km デモに参加した。それはそれで得難い経験だったのだが、多くの人は初日から伊達キャンプから出発するデモに合流できないのかとい

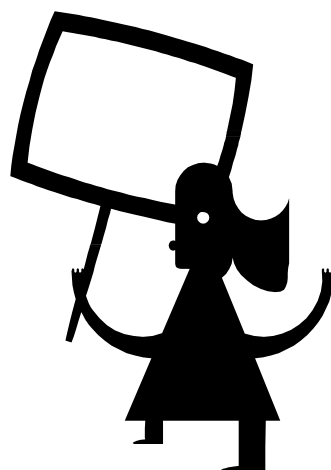
う意見を口にしていた。実際伊達にいる友人たちと連絡を取り合い、なんとかならないか話もしていた。伊達キャンプからのデモは、そんなに長距離を歩くでもなく、解散地点は洞爺湖畔のウィンザーホテルが望める場所だ。2日目、22kmを歩ききり、3日目に行動するとしたら、もう伊達への合流しかないだろう、とみんなの意見は固まっていた。同じ主催者がやっていたはずの壮瞥キャンプからは、毎日伊達キャンプからのデモに合流していたという。もう主催も参加者もない(そもそも主催という枠があんまり機能できる状況でもなかったのだ)。やりたい人が自分たちで動くしかないのだ、と手分けして公共交通機関を探し、時刻を合わせ、行くメンバーを募り、伊達キャンプ側との受け入れ確認・交渉をし、翌日に備えた。翌日は、公安に阻まれる！電車に間に合わない！怪しい人が混じってる！タクシーが足りない！お金が足りない！などいろんなヒヤヒヤやミスもあったものの、希望者みんなでなんとか伊達のデモに合流することができた。

毎日毎日、遅くまで明日の行動の話し合いをした。日本の警察の横暴ぶりに、海外勢から驚きと怒りと、その牽制のためにあまりに自己規制しすぎているのではないかという日本の運動への疑義も出されたし、海外(おもにヨーロッパ、韓国)でのデモのやり方や様子を聞いたり、シュプレヒコールをいろんな言語で練習したりもした。長い長い22kmデモの最中には、世界に名だたるジャパニメーションが歌に話にいろんなところで大活躍だった。海で休憩して泳ぎ、山道を占拠して一休みした。トンネルで大反響するシュプレヒコールや太鼓の音を楽しんだ。地元の人には結構応援された。

キャンプを引き揚げてからも、札幌で、東京で、関西で、海外勢も含め、あの反G8行動はなんだったのか、なぜあんな制限・監視された中での行動だったのか、日本の状況の打開はできないのか、多くの議論があった。最終的に伊達・壮瞥・豊浦と3キャンプ合同のデモをしてみて初めて、いろんな国・文化背景・思想・世代・環境の人々が集まってものごとを達成していく大変さと、でも同時に可能性も感じた。そもそも3つのキャンプ、2つの行動

に別れたのにも党派や、一緒にやれる・やれないの問題があったとか、海外勢を受け入れられるのか議論があったりとか、海外でのやり方を単に輸入しようとして失敗したんじゃないとか、日本で積み上げられてきた運動の蓄積を無視してないとか…。いろんな話を聞いたし議論した。でも実際に、海外からやってきた有象無象と国内の有象無象と、党派と呼ばれる人たちと、最終的には警察に分断されたりもする緊張状態の中、一緒にデモした。できた。そのときの行動で逮捕者がでなかったのは運が良かっただけかもしれない。でも、何度かの行動、キャンプ、それまで／その瞬間瞬間にできた信頼関係の中で、抗議行動はつくられていったし、言葉が通じなくてもスクラムを組み、一緒に警察と対峙した。その可能性を、参加者みんなでつくりあげたことが、今回の大きな成果だったのかもしれないと思う。

何しろ日本でこういう海外からも多く参加するキャンプの取り組みは初めてだったようだ。これからもこういったことがされるのか、されるとしたらどういう形で今回のことを生かしていけるのか、各現場で起こっている事柄とどうやって結びつけていけるのか、いろんなことを考えた取り組みだった。(毎日あった事細かなことや詳しいニュアンス、私個人が感じたことなどは、ここには書き切れてません。本当は関西で行ったメンバーで報告書でも出したかったのですが、今のところ叶わず。とりあえずここに今できる限りの報告を載せることにしました。今後の行動のためにも。ごく個人的な、日記のような形で書いたより詳細なものを夜回りブログにアップさせてもらったので、興味のある方はどうぞ。→<http://d.hatena.ne.jp/yomawari/>)



第5章 参加者感想

広い視野で…

今津 祥

7月の後半から3回だけ参加した「野宿者」支援活動の中で、色んな「野宿者」に（「」をつけているのは、彼らを「野宿者」と同定するのは良くないと思うからです。）会いました。駐車場の裏の茂みに作った小さな家に住んでいる人。瀬戸内海沿いの大きな駐車場の片隅に、車を住居として住んでいる人。線路の下を住居にする人（電車の音がうるさかった）。公園に寝泊まりする人。話してみても「野宿者」という言葉から喚起されるイメージと違い、気さくな人、よくしゃべる人もいました。一方、仕事が見つからず、食べる物にも困っている人も当然いました。

「私たちが「平和」に暮らしている片隅にこういう人がいるのか」と衝撃を受ける人もいと聞くけど、湯浅誠さんとかの本を読んでそういう人が存在することは知っていたので（あくまで知識としてで実際に会うのとでは全く違う）、そういう衝撃は正直あまりありませんでした。それよりも、自分が感じたのは「野宿者」「ホームレス」といった言葉（こういった言葉だけでイメージが限定されてしまう）に加えて、メディアから発せられる偏見に満ちた情報がいまって、いかに自分の中に固定された、偏見に満ちた、そういった言葉や情報以上に思考/想像できないような「野宿者」のイメージが形成されてきたかということでした。実際、「野宿者」の事を何も知らないのに、いわゆる「偏見」でそういう人たちを判断している人が大半なのではないか、と思います。「野宿者」を実際に見て、自分の「偏見」に気付く人はいいんだけど、怖いのは、あまりにも自分の＜偏見＞とか＜常識＞が深く内面化している人が、「野宿者」を見てもそういった「偏見」とか「常識」を通してしか見ることができないことだと思います。と、ここまで、思ったことをとにかく書いてきたわけですけど、結局何が言いたいのか

というと、「常識」「偏見」が深く内面化されてしまう前に、広い視野で世の中を見る必要がある、ということです。自分の通ってる大学の授業の自己紹介で派遣会社に働きたいと言ってる人がいました。でも今盛んに言われる非正規・正規雇用の問題に深く関わっているのが派遣会社なのに、そうした負の面を見ずにそういう仕事を選択するのはまずいと思います。別にそう選択することを否定するわけではないけれど、まず負の面を直視し、それをしっかり受け止めてから選択すべきだと思います。「野宿者」問題だけに限らず、世の中には多くの問題があります。そして、そういった問題の多くは、普段生活している中で実感しにくい/自分のこととして考えにくいもので（自分も多いにそういうところがある）、メディアを通してでは知り得ないものです。だからこそ、自ら進んで知ろうとする必要があると思います。今は大学1年生から、いや小・中学校でさえ、仕事の事を考えるように教育されているように思うけれど、その前に、野宿者の問題も含めて多くの知っておかなければならないことを教えるべきだと思います。自分も少しでも広い視野で物事を見れるようになればと思います。

夜回りに参加しての感想

佐野 歩

私はまだ2回しか夜回りに参加できていませんが、その中で思ったことを書いてみたいと思います。

まず、ガイダンスで聞いたことに私は大きな衝撃を受けました。震災の時の行政の対応や人々の対応、そして現在の行政の対応。これらはあまりにもひどく、すぐには信じられませんでした。そして、その話を自分の中でようやく受け入れたとき、次に自分に何ができるかを考えてみました。しかし、この問題は根が深くとても自分一人ではどうこうすることではないとわかり悶々としました。でもそうして考えているうちに、野宿の問題全般に対して何もで

きないと思い悩んでいるより、自分の目の前で困っている人たちのために何ができるかを考えて前進していくべきではないかと思うようになりました。だから、夜回りに参加することを通して、自分にできることをしていきたいです。

次に実際に夜回りに行つて印象に残ったのは、最初に訪問した人に毛布を渡した時にしきりに「ありがとう」とか「すまんなんあ」とおっしゃっていたことです。そうやって感謝してもらえるのは自分でも嬉しいし相手の方が本当に喜んでくださっているのならそれにこしたことはないです。しかし自分たちが何かすることで、相手の方が感謝を通り越して「してもらって申し訳ない」と思うようなことがもしあるとすれば、それはお互いにつらいと思います。そして「申し訳ない」と相手の方が思われなようにするには、やはりお互いに信頼関係を築き、言いたいことを言ってもらえるようにすることが大切だと思います。私は、人と話すのがあまり得意ではなく、なかなか気も利かないので、できるだけ多く相手の方と会うことで、そうした関係を築いていけるようにしたいです。

夜回り感想

田和 俊哉

まだ夜回りを始めて 1 年目の田和です。見ることに聞くこと知らなかったことばかりで驚きの連続です。自分が生活する地域にこれだけの野宿者がいたなんてそもそも気がつきませんでした。不明の至りです。もっとこうした問題を多くの人たちに知ってほしいと思います。このごろ少し私も含めて参加者が少なくなっている様なので、気になります。この際思い切って今まで以上に地域の住民や神戸大学の救援隊など問題意識を持った学生さんなどに声をかけて両手を広げて見てはどうかと思います。私もより多くの人に話しかけ、一緒に参加するよう提案して行くつもりです。六甲おろしと競争です。冬が本格化する前に隊伍を整えましょう。

夜回り感想文

臺 信一郎

これを書いているのは 11 月の中旬。段々と寒さが厳しくなってきた。野宿生活をする人にとっては冬の寒さは生死に関わる。真冬の夜回りは体の芯までしばれる。野宿をしている人で凍死する人がいる事実を実感する。わたしたちが訪ねていく人たちはどんな気持ちであの寒さに耐えているのだろう。

最低限度の生活を保障するという法律のウソや世間の偏見とか就労や生活場所からの排除とか、そういう彼らを取りまくもろもろの問題とどう向き合っていたらいいのか。自分はまだよくわからない。今は訪問先の人としゃべって、その人の人柄や生活にふれて、くみ取れることがあればみんなで話したりする。自分が今できているのはそれだけだけどそれを大切にしたい。そこからこんな状況で生きている人もいるんだって、あなたの持っている「野宿者」のイメージはそうかもしれないけど、わたしが夜回りで会っている人はこういう人だって自分の周りの人に言っていくことはできると思う。

夜回りとは別の活動だけど、知的なしょうがいのある人の介護に入っていて町に出ると、よく周囲の好奇の目にさらされる。そんな時差別ってこういうもんかって思う。そして自分がこれから今の活動を続けていくなら、そういう視線とも向き合っていけないといけないのだろうと思う。それは自分で思っているよりきつとしんどいことだし覚悟のいることなんだろうな。

話がころころ変わるけど、夜回りをしていての雑感を。夜回りをしていて、相手方に気をつかわせてしまっていたり、休んでいるところを起こしてしまったりということがあつた。訪問先のひととの会話でやっと気付いたのだけれど、夜回りをする、ということ自体は訪問先の人の希望とは別に行なっているところがあるのだと思う。それを自覚したうえでいかに訪問先の人の意思を尊重できるか、迷惑かもしれないけどこういう思いでやっているということが伝えられるか、かな……。

最後に、最近メンバー間で話しているジェンダーやセクハラについてのこと。これについてはいろいろ考えてはきたけど、いちばんショックだったのは自分の中にも性差別があるってこと。分かり易い例だったら「女性は守らない」という意識。夜送っ

ていくとか。女性は送る。男性は送らない。それがなんでっていうのを考えたことがなかった。最近ジェンダー関係で女性の視点からの本とか読んでいるが、はっとさせられることがいろいろとある。これから自分自身の性意識には根気強く向き合っ
て考えていくしかないと思う。

カテゴリーの関係と1対1の関係

中村 祥規

最近、夜回りで出会う人たちと自分たちとの関係について、いろいろ考える。

夜回りをしていると、近所の人からちょっとした手助けをしてもらっているという話をときどき聞く。たとえば、ある公園に住んでいるNさんは、寝具などの身の回り品を近所の人に預かってもらっているそうだ。だから、Nさんが寝ている公園には、ほとんど私物が置かれていない。公園で暮らしている人が追い立てられるのは、私物を公園に置いていて、そこから周辺住民の苦情に発展するケースが多いので、Nさんのように荷物を預かってくれる人がいるのは、とても助かるだろう。

また、別の公園で暮らしているIさんからは、公園に散歩に来る人が、自分の家で出たアルミ缶を持ってきてくれるという話を聞いた。これも、Iさんにとってはありがたいことだろう。野宿している人と地域の人との関係というと、追い立てや襲撃のことがすぐ頭に浮かんでしまうが、Nさんの荷物を預かってきている人や、Iさんにアルミ缶を持ってきてくれる人のように、野宿している人に自分のできる範囲の親切で応じてくれる人もいる。

ここからは推測になってしまうが、そういう人たちのそういう親切は、「野宿している人の支援をしよう」と思ってなされているものではないように思う。それよりはむしろ、「近所の公園にいる、顔見知りのNさんやIさんに、できる範囲のことをしている」という感覚に近いのではないかと推測する。親切の対象は、あくまでNさんやIさん個人であって、「野宿している人」ではない。ちょっと乱暴に言ってしまうと、「近所づきあい」の延長線上として、NさんやIさんとの関係があるのではないか

と思う。

一方、私たちの夜回り活動はといえば、「野宿している人を訪問する活動」だ。私たちがNさんやIさんの所を訪ねるのは、NさんやIさんが「野宿している」からだ。私たちなりにいろいろ気を配ってはいるものの、「野宿している人」というカテゴリーとは、(当たり前かもしれないが)無縁ではない。NさんやIさんにご近所さんとの関係とは、質的に違う。

そして、私たちとの関係に比べれば、NさんとNさんの荷物を預かってくれる人との関係や、IさんとIさんにアルミ缶を届けてくれる人との関係のほうがよほど、本来の「対等な人間同士のフラットな関係」に近いように思う。むしろ、私たちとNさんやIさんとの関係のほうが、「野宿している人」というカテゴリーを介した、いびつな関係なのかなと感じる。

もちろん、私たちの夜回りでも、そうしたいびつな関係を、少しでもまるめようと心がけてはいる。また、夜回りが、NさんやIさんのご近所さんのような関係になるべきだ、とも思わない。そういう関係になってしまったとしたら、活動のもうひとつの目的であるはずの、野宿せざるを得ない人が生み出されてしまう構造についての問題提起からは、遠ざかってしまうことになると思うからだ。それぞれに動機や関係のありようが違うので、どちらがいいということではない。

ただ、野宿している人を指して、「ホームレス」「野宿者」といったカテゴリーでくくってしまうことは、相手に失礼なことであるとして、私たち自身が繰り返し言ってきたはずのことだ。ところが、夜回りという活動じたいが、そういうカテゴリー化と切り離せないとしたら、なかなかやっかいだ。だからどう、という答えがすぐに出せることではないと思うが、活動のありようについては、もう少し考えていきたいと思う。

声にならない

鍋谷 美子

こうありたい、したいと思っていても、それを伝えることができないことがある。

自分が虐げられていると思っけていても、それを口に出して、やめて、おかしいよ、と言えないことがある。この1年余り、そんなことを実感するばかりの日々だったように思う。

2009 年、年明け、炊き出し現場で親しい人に急に胸を触られ、周囲の誰にも介入されなかったことで、私は完全に孤立した。それはたまたまだったのかもしれない。もしかしたらあの人やこの人が近くにいたら、なんとか、介入され、私は持ちこたえられたかもしれない。でも、誰も声をかけて来なかった。この世界で誰も私の味方はいない、そんなふうを感じた。ひとに対する絶望。これまでつくってきた（と思っけていた）信頼は、なんとちっぽけなものだったんだろう、と愕然とした。あの人もある人も、信頼できるなかまだったはずだ。でも話せなかった。もし話して冷たくあしらわれたら…。そんなことよくあるよ、と苦笑されたら。あとで、といなされたら。悪い予想ばかりが浮かぶ。しかしその後それはきちんと裏切られ、私は絶望の淵から戻ってくることもできたのだが。戻ってきたところで、やっと私は現状を目の当たりにした。

ああこれまで、このことは話されてなかったんだね。私もきちんと話そうとしてこなかったんだね。タブーだったんだ。だからどうしていいか分からなくなっただんだ。その後いろんな人と話すにつれ、そのことが身に沁みて分かってきた。セクハラって言葉が何を意味し、それを訴えるということがどういうことなのか、分かってきた。ふだん聞く分には、揶揄と手垢にまみれた、なんとなくイヤな響きのある言葉だった。冗談や軽い牽制にしか使っけてこなかった。それを使う私も、きちんと問題を見ようとせず、その言葉でお茶を濁そうとしていた。

丁寧に伝えていかないといけな。差別という言葉もそうだ。そこで思考停止してはいけな。何が、どうやって人の尊厳を傷つけ、じわじわと人を損なっていくのか。「しんどい」と言うことすらできず、おのれの置かれている状況に気づかない。それに気づき、声をあげることもそれ自体が、いかに大変なこ

とであるか。自覚しないといけな。それだけ状況は酷いのだ。私たちのしようとしていけることが、声にならない声をあげていこうとすることなら。

反 G8 と夜回り

野々村 耀

2008 年の夏に、北海道・洞爺湖のそばで、サミットが開かれました。僕は個人的に（YWCA の夜回り準備会としてではなくという意味）抗議にいきました。でも、僕の中では、夜回りと繋がっけていないわけではないので、なぜ、反 G8 の活動に参加したのかを、書いけておきたいとおもいます。

横浜・寿町（日本で三番目に大きい日雇い労働者の町）に関わっけている何人かが、「木曜パトロール」という夜回りを始めたのは、1984 年の1月でした（その頃僕は、寿町の障害者の作業所で働いていました）。83 年に山下公園などで仕事にあぶれた労働者が野宿して、中学生達に殺されたり、怪我させられるという事件がありました。日雇い労働者の組合から仲間を守るためにパトロールするから、毛布を提供してくれないかと、日雇い労働者でないが寿町で活動している者達（教会の牧師、診療所の相談員、障害者の作業所の指導員等）に呼びかけがありました。

毛布を集めて提供すること自体はそれほど難しくはないが、どうしてこんな事件が起こるのか、それ以前にどうして人が野宿せざるを得ないのか、自分が日雇い労働者ではなく、労働者を利用し差別する側にいる市民として、野宿する人の実情や思いを知らないで、毛布を提供するだけではまずい、といふので、自分達もそういう立場で夜回りをしようということになったのです。パトロールという名前は、パトカーを連想し、野宿している人を監視するようだと、言われることもありますが、しばしば襲撃される野宿する人の側に立っけて、襲撃するものを監視するために巡回しようという意味でつけたものでした。

84 年当時は、日本の首相は中曽根康弘、イギリ

スはサッチャー首相、アメリカ合衆国大統領はレーガン。彼／彼女らは新自由主義路線の政治的旗手でした。それまでの社会保障・福祉政策を切り捨て、小さな政府にし、市場に任せ、民間の活力を生かすという言い方で、企業が規制されないで自由に利益を追求できるようにするという政策でした。それを要求したのは財界・資本でした。中曽根首相は、日本の労働運動を破壊するために、国鉄を民営化して労働組合を疲弊させました。夜回りをするようになります、関連した新聞記事が目に残るようになります。ロンドンにホームレス 15 万人、などという記事を見て驚きました。アメリカにも、何十万人ものホームレスがいる。しかし、以前からそうだったのではなく、新自由主義経済政策によって引き起こされた事態だとわかってみると、いつもアメリカの後追いをする日本、アメリカが風邪をひくと日本は肺炎になるといわれる日本でも、やがてそういうことが起こるだろうと思われました。

国労や、総評が力を失ったのは、大企業の労働組合が、ことごとく労使協調路線になり、苦しんでいる労働者の側に立つことをやめたからでした。企業が、利益を上げるためには、人を減らさねばならない、という、労働組合も安易にそれを受け入れました。ストライキは社会の迷惑だ、などといって、労働組合が闘うことを多くの市民が、拒否しました。労働者を守るための規制を含めて、様々な規制をなくすことが、消費者の利益になる、輸入規制はなくせ、といわれると、都会の消費者は、外国から安く上等のものが輸入されるのはよいことだと歓迎しました。

農村のことを都会の住民は余り考えたこともなかった。安いものが輸入されれば、それを作っていた人はどうやって暮らせばよいのか？　こういう疑問を封じるために、経営努力という言葉が威力を発揮しました。

90 年代のはじめ、少しの間（95 年の関西の震災まで）北海道で暮らしたのですが、農家が離農する話を良く聞きました。酪農家が、100 頭もの牛を捨てて、夜逃げした、という話を聞いたとき、びっくりしたのですが、牛肉や乳製品の輸入が自由化され、外国から安い肉、安い乳製品が入ってくると、国内

産のものは値下がりします。酪農家は、乳価が下がるので、同じ収入を得るには量を増やさなければならない。乳量を増やすには、牛の頭数を増やす必要がある。そのためには牧場を広くし、広い牧場には大きな機械が必要になって、それをまかなうには借金をして・・・借金漬けの経営になる。

酪農家は牛に子供を生まれ、子牛のために出すミルクを横取りして人間に売るわけです。その生まれたばかりの子牛を、肉牛を育てる肥育農家に売り上げも重要な収入源でありました。一頭 15 万円くらいで売れたと聞きます。それが牛肉が自由化されると、3 万円くらいに値下がりした。毎年、10 頭、20 頭売ること成り立っていた経営が、成り立たなくなり、借金を残して夜逃げすることになるのです。

横浜の夜回りの報告書を読んだ、地方出身の人が、自分の村から都会に出稼ぎに行ったおじさんが帰ってこない、どうなったんだろうと思っていたが、こんな風に（野宿生活に）なったんだろうか、というのを聞いて、「ホームレス」問題というのは、大都市の問題のように思われがちだが、根っこには、暮らすのが困難な農村の問題としっかり結びついていると思うようになりました。

僕も、北海道で仕事を探しに職業安定所（ハローワーク）に行ったのですが、紹介されるのは愛知県の自動車関連の期間工ばかりでした。

僕は 95 年に、阪神淡路大震災をきっかけに神戸に来たのですが、97 年にカンボジアで、強制追立てを監視するネットワークの会議があって、オブザーバー参加しました。アジア諸国で人権としての居住権を守ろうという人たちの集まりで興味深かったのですが、そのときに「構造調整プログラム」が問題だという意見が多く聞かれました。それまで、自分の周りでは聞いたことがなかったのですが、構造調整プログラムと言うのは、対外債務の返済に支障をきたした国に対して世銀・IMF が提案する政策パッケージです。1980 年代の初めに累積債務問題が深刻になってきたときから本格的に採用された政策で、具体的には（1）通貨引下げによって輸出力を強化し、輸入を制限する、（2）政府の公的

支出を削減する(3) 価格統制を撤廃する、(4) 輸出入や為替の管理を撤廃、(5) 国営企業を民営化する。これらの一連の政策の採用を条件に、債務国への貸し出しを行うというものです。

債務国は、世界銀行や IMF の融資を受けるために、こうした条件を飲まざるを得ない。すると、社会福祉などは大幅に削減され、貧しい人の生活はドンドン苦しくなる。そうして、ますます低賃金の労働力になっていくわけです。

アジアの国々では、放置された国有地に、貧しい人が住み着き、スラムになったりしている。その土地を国が民間企業に売り渡すと、企業は住んでいる人を「この土地は自分のものだ、そこにいるのは違法だ」といって追い出したりする。強制追いたて監視ネットワークは、それに対抗し、国際人権規約などを活用して、土地の所有権がなくても、住んでいる人には、むやみに追い出されない権利(居住権)があることを主張するのです。

日本でも中曽根政権以降の新自由主義政策の中で、いろいろな福祉施策が切り捨てられましたが、85 年に労働者派遣法が提案されたとき、日本中が、いつでも切り捨てられる日雇い労働者の町になる危険性を感じました。今になって、労働者派遣法の危険性がやっと問題になってきましたが、すでに以前から準備されていたのです¹。

こうした、新自由主義政策、それを推進する先進国の財界・政界は世界経済フォーラムのような会議や、WTO、世界銀行、IMF のような非民主的な組織、そしてサミットのような私的な会合を用いて、巨大な資本の利益を守り、世界中に貧しい人を生み出し、世界はこんなものだと思いこませようとしているのに対して、世界中の貧しい人が「もっと違った世界がありうる」という声をあげてきました。世界社会フォーラムやサミット反対運動などです。これまで、参加できなくて残念だったので、日本でのサミット反対の仲間に加わりたと思っていましたが、

さて、どうやって参加すればよいのかわからないでいました。

2007 年の秋に、フランスで発行されているエスペラント語²の雑誌で、北海道自由エスペラント協会の、「世界のエスペランチスト・エスペラント学習者・友人たちに反 G8 の闘いに参加することを訴える。」という呼びかけを見つけて、連絡を取り、キャンプに参加し、国外からの仲間と交流したこと、日本に入れなかった仲間のことなどいろいろ書きたいことはありますが、・・・。

サミットは国連から委託されたものでもなければ、各国の国会から承認されたものでもなく、全く私的な会合、国際資本の利益のための密室の会議であり、グローバリゼーション(巨大資本の世界的展開)を推進するものです。このために、世界中の労働者・農民・市民・先住民たちが苦しめられています。その新自由主義政策には 5 つの柱がある。1. 関税障壁の撤廃(農産物の輸入自由化) 2. 公共部門の民営化(鉄道、郵便、医療、水道、教育、などの諸分野に民間参入) 3. 労働の柔軟化(労働法制の基準緩和、非正規雇用の推進) 4. 規制緩和(金融、資本投資の規制、環境規制などの緩和) 5. 警察国家化(テロ対策、移民管理の強化)といわれています。

詳しく書くときりがありませんが、エスペラントは註 2 に書いたように、分断された民衆が、相互理解のための言葉によって、分断を乗り越え、連帯しようという願いを含んでいます。

北海道の反 G8 のキャンプでは、残念なことに外国からの参加希望者が、日本政府の妨害で入国できなかったりしましたが、何人かとのエスペラントによる交流がありました。

² エスペラントは産業革命後の変革の時代 1887 年、ロシア領ポーランドの眼科医ザメンホフが考案した人工言語。当時ポーランドには諸民族が分割支配下で生活をし、言葉が違うので反目しあっていた。民衆同士の軋轢に心を痛めたザメンホフは、エスペラントによって相互理解を可能にしようとした。エスペラントは民衆にも容易に習得・使用できるように、簡単な文法と国際的にわかりやすい単語でできている。現在、世界 100 以上の国・地域で 100 万人の学習者・使用者(エスペランチスト)がいる。

¹ 「労働者派遣法は 19 年を経て、制定当初に私が構想していた姿がほぼ実現して派遣法が完成の域に達したのは感無量です」 製造業への適用が解禁された年の、派遣法の産みの親高梨昌信州大名誉教授の挨拶。

具体的に人と人が、対等に語り合うことで、世界中に広がっている、貧困——失業、野宿もその一部です——の解決を目指すことの可能性をいろいろ感じました。

サミットから半年後、08年12月に韓国に行き、反G8キャンプで出会った若いエスプレランチスト達と再会しました。その人たちの助けで、ソウル駅周辺で野宿している人や、その人たちの医療や生活を支えている大きな施設を運営している組織を訪問したり、ちがった視点で活動している人の話を聞くことが出来ました。世界中に同じ問題が広がっているのですから、いい意味でのつながりが必要だと思います。

夜回りに参加して

藤原 史行

訪問するようになって感じたのが、人にもよりますが、饒舌に話してくれる人が多いということです。私はほとんど相槌を打つくらいでしたが、親しい近所のおじさんと話をするようでした。参加するまでこの会の活動を野宿している方々の安否確認という認識しかなかったのが、このことがとても印象的でした。これは、これまでメンバーの方々が信頼関係を築いてきたことが大きいと思います。この会に参加してもう一つ感じたのが、この会のメンバーの方が野宿している人達を客体として捉えているのではなく、主体として尊重していることです。そのように感じる場面がたくさんあり、そういう姿勢が信頼関係を作っていく上で大切なことなんだと実感しました。

会に参加するようになってから今まで野宿の問題とは特に関係ないと思っていた出来事も、実は野宿している人達に影響を与えていたことを知りました。家電リサイクル法や、神戸市のごみ分別の強化が粗ゴミ集めを収入源とする人たちにとっては収入を得にくくなるという不利益があったのです。リサイクルを進めたり、ゴミ・環境問題に取り組んだりすることも大切です。しかし、野宿している人達の貴重な収入源にかかわる問題です。上の法律や

神戸市のごみ分別の強化の是非はわかりませんが、リサイクルや環境・ゴミ問題で、そのコストを負担するという不利益を産業界や圧力団体なら、献金や票で行政や政治家に声をあげることができるのに、粗ゴミ集めで生計を立てる人達は自分たちの受ける深刻な不利益に対して声をあげることができないのは問題だと思います。この問題は生活の糧を奪われるという深刻な問題だけでなく、それに対して不利益を被る人の声を反映させられなかったことの問題もあると思いました。

夜回り活動を通して

森 美知子

私は、夜回りに参加するまで、野宿者の人々に対して少なからず偏見を持っていた。野宿をしなければならなくなった背景については、ニュースや大学の授業を通してなんとなく知っていたものの、やはり自分とは別世界の人という感じが強かった。それは、私に限ったことではない。ある日の授業で、野宿者のことや、ビッグイシューについての話になった。先生の「ビッグイシューを買っている」という話を聞いて、何人かの生徒が反応した。「何かされたりしないの?」「金品を要求されそう」など、「何かされそうで怖い」というような発言が多かった。このとき、私も内心「本当に大丈夫なんかなあ」と思っていた。それは、野宿者がどんな人々なのか知らない、という無知からくるものだったと思う。しかし、夜回りに参加して、実際に野宿者の方がたと関わるようになって、怖い人たちではないことや彼らを取り巻く現状などを知っていくうちに野宿者への偏見というのはなくなっていった。そして、自分の何倍も人生経験があり、世の中の酸いも甘いも知っている野宿者の方がたとの会話は、暗い話もあるが、楽しい話やためになることもあり、野宿者の方がたとの会話が、今ではとても楽しみになっている。

私は、夜回りに参加して日は浅いが、前述した大学での授業の日のようなことがあったら、「野宿者は怖い人ではない」と反論できると思う。野宿者のことについて、まだまだ新人の自分の体験を話すだ

けで、相手の偏見を完全になくせるとは思わない。それに、偏見の解消や、野宿者がどんな人々か知るには、やはり本人が実際に野宿者と関わることが一番だと思う。しかし、野宿者と関わったことがない人、偏見を持っている人にも、野宿者も私たちと同じ社会の一員だということ、日々自分の力で生きていこうと頑張っている人達だということを、少しでも相手に伝えられるように、私自身なっていきたい。

新潟に引越して

山本 かえ子

今年 5 月に結婚し、新潟市に移住して半年になります。関西生まれ、育ちの私にとって、初めての遠方暮らしです。半年経ちましたが、行動範囲はせまいです。というよりも、住居という定点を支えにして、何とか生活が成り立っているような感じです。

神戸で出会った野宿している人から、たびたび「慣れた場所でないと生活しにくい」という言葉を聞いてきました。この「慣れ」ということについて、今回の経験でいろいろ考えさせられました。見知らぬ土地に住むには、その場所に慣れる時間と環境が必要です。自分の定点になる住居。そして、仕事のような目的の有無、生活を維持していくお金の有無、知人の有無、どこに何があるのかわかる地理的な知識の有無。定住生活をする人々が多いこの社会のなかで、生活を築いていくためのハードルがかなり多くあることは神戸の活動のなかで気づかされてきたけれども、それらのハードルを越えて生活を立てていくためにはかなりの時間と労力がかかることを実感させられました。「住居」という定点がある私でこれだから、その定点さえない人にはどれほど大変なことだろうか、と…。

相方が既に 3 年前から転勤で新潟に来ていたため、そのときから年に数回程度新潟を訪れていました。当時は駅の通路にダンボールハウスが並んでいて、寒い中大変だろうけれど生活感のある風景だったのですが、G8 サミットの労働相会議が新潟で開催される直前に立ち退き要請があったようで、2007 年夏以降、ダンボールハウスは一つも戻って

はきませんでした。こちらではまだ野宿している人に関わる活動に参加できずにいますが、いつか機会をみて参加したいと思っています。

夜回り 2 年目に思ったこと

吉村 美香

私が夜回りに参加し始めてから一年半ほどだ。毎回参加できてはいないが、活動をするたびにいつも感じるのは、その人によって人間関係、仕事など、生活はさまざまであるということ。私たちがそれぞれ異なるように、野宿している人たちにもそれぞれの生活があるという当たり前のことを、夜回りで目にして耳にして知ることができていると思う。

また、特に今年は色々なことを通して、野宿している人々への排除を目の当たりにした。春から実施された定額給付金が野宿している人にはきちんと支給されていないことや、近隣の中学生による襲撃などは野宿している人に話をうかがって知った。それだけでなく、つい先日には神戸大学生による襲撃動画問題もあった。私と同じ大学生がやったことはもちろんショッキングだったのだが、いってみればこのような行為はきっと今回の件だけではないだろうし、このような意識をもつ人がまだまだ少ないのだろうと思った。実際に直面している野宿している人たちに比べれば私はなににも分かってないかもしれないが、そうやって行政からも地域からも除け者にされている多くのことに歯がゆかった。

中には、野宿している人たちでないと分からない私には見えてない排除や、私が知らず知らずにしてしまっていることもあるのだと思う。というのは、最近の夜回りで「訪問される側の気持ちも考えてほしい」という野宿しているある人の言葉を聞いて、はっとさせられた。自分は今まで夜回りされる側の気持ちを本当にきちんと考えたことがあったのだろうか。こういうものだろうと知らず知らずに決めつけてしまっていたのかもしれないと気付いた。ひとつでも野宿している人の生きづらさを減らせるように、これからも夜回り活動に参加していきたいと思う。

【巻末付録：これまでの活動報告書 目次】

2004 年度活動報告書 Vol.1

(2005 年 10 月発行)

I. 活動状況

1. 夜回り準備会について
2. 夜回りの実施状況
3. 病院訪問と昼回り
4. イベント参加・連続講座・読書会など

II. 野宿している人たちの状況と課題

1. 健康と医療
2. 追い立てと襲撃
3. かかわる人々と団体
4. 生活と仕事
5. 生活保護

III. 参加者の感想

5. 参加者の感想

資料： 襲撃についての神戸市教育委員会への申し入れ書／襲撃について報じた新聞記事

活動報告書 Vol.4

(2009 年 2 月発行)

1. 神戸 YWCA 夜回り準備会について
2. この 1 年を振り返って (2007.7～2008.7)
3. 活動の中で出会った人々
4. 参加者の感想

資料： 追いたてについてのピラ

2005 年度活動報告書 Vol.2

(2006 年 11 月発行)

1. 神戸 YWCA 夜回り準備会について
2. 2005 年度を振り返って
3. 活動の中で出会った人々
4. 2006 年 1 月 30 日・うつぼにて
5. 生活保護制度「改革」と「ホームレス自立支援」策の方向性
6. 参加者の感想

資料： バラ博への抗議文

【コラム】(後ろの数字が、そのコラムの入っている報告書の号数を表しています)

- ・ YWCA とは (1,2,3,4)
- ・ 神戸の冬を支える会 (1,2)
- ・ カトリック社会活動センター (1,2)
- ・ 一斉夜回り (1,2,3,4)
- ・ 灘チャレンジ (1,2)
- ・ 更生センター、更生援護相談所 (1,2,3,4)
- ・ 神戸市の低家賃施設について (1,2,3,4)
- ・ ドヤ (1,2,3)
- ・ 不服申し立て (1)
- ・ 「ホームレス」という呼び方について (2,3,4)
- ・ 全国地域・寄せ場交流会 (2)
- ・ 行旅病人・死亡人取扱法 (2)
- ・ 川村事件 (2)
- ・ ホームレス自立支援法 (3)
- ・ 巡回相談員 (3)
- ・ 都賀川流域の変化 (3)
- ・ 見えなくなる排除 (3)
- ・ 追いたてについて (4)
- ・ ケースワーカーとは (4)

活動報告書 Vol.3

(2008 年 1 月発行)

1. 神戸 YWCA 夜回り準備会について
2. この 1 年を振り返って(2006.7～2007.7)
3. 活動で出会った人々からの聞き取り
4. 座談会・長居公園テント村の強制排除を振り返る

神戸 YWCA 夜回り準備会 2008 年度会計報告

(自：2008 年 4 月 1 日～至：2009 年 3 月 31 日)

【収入】

【支出】

(単位：円)

項目	金額	備考	項目	金額	備考
寄附金	225,713	32 件	物品費	78,812	炊き出し食材費 (越冬)・下着・蚊取り線香・カイロ・医薬品・コーヒー等
助成金	230,000	NHK 歳末たすけあい義援金 200,000 円 /兵庫県社会福祉協議会 (県民ボランティア活動助成) 30,000 円	備品消耗品費	37,305	会議資料費 (コピー代等)・パソコン周辺機器・かご等
活動報告書頒布	30,000		車両費	115,851	燃料費・車両賃借費・駐車料等
謝金	30,000	神戸大学ボランティア講座実習受け入れ	印刷製本費	110,250	活動報告書印刷費
物品売上	52,500	灘チャレンジ模範店	通信費	1,869	振込手数料等
雑収入	3,550	残余品の買い取り等	プログラム費	18,490	灘チャレンジ模範店・展示
			支払寄附金	50,000	神戸・冬の家の越冬越冬活動に協賛
			管理費	159,186	分室維持管理費、人件費等
合計	571,763		合計	571,763	

寄附・寄贈報告

(自：2009 年 2 月 1 日～至：2009 年 11 月 30 日、敬称略)

東昌宏	伊吹三樹雄	岩崎滋	大久保生子	尾島敦義	お遍路おばさん
影山雅子	片山恵	川辺比呂子	車田博子	小泉浩	後藤安子
杉田哲昭	砂脇恵	田坂富士男	田花安子	津田昌夫	中桐寿子
中田洋子	西島明子	西部智子	西山秀樹	二宮百合子	林祐介
平木貴美子	牧野哲	松本保	三島孝子	宮田洋子	森崎武雄

金銭面、物資の形で多くの御寄附、御寄贈をいただきました。ありがとうございました。

万が一お名前の漏れや記載間違い等ございましたら、当会へご一報いただけると幸いです。

【編集後記】 ようやく報告書 5 号を出すことができました。この 1 年余りは、中心的に活動を担ってきた何人かのメンバーがそれぞれの事情で活動に関われなくなり、なかなかハードな年でした。その中で、今回の報告書は書けることを書いて出そう、となりました。なので、それぞれメンバーの思いとしてはあるが、会として話してまとまっているわけではないところもそのまま載せています。さらに、昼回りや病院訪問でのできごとがほぼ抜けてしまいました。これを書いている現在、生活保護の締め付けはますますきつく、病院訪問では、退院後の敷金は出せないというケースワーカーにたびたび出くわしています。そしてそれは今後も厳しくなっていくだろうと感じますが、めげずあきらめず、細々とでもやっていけたらと思っています。内容について、意見や疑問、感想などあれば、ぜひ私たちに寄せてください。反応あつての報告書なので。(なべたに)

※今号の報告書は、「しみん基金 K O B E」の助成を受けてつくりました。

神戸YWCA 夜回り準備会 活動報告書 Vol.5

2009 年 12 月 25 日発行

編 集 臺信一郎・中村祥規・鍋谷美子・野々村耀・藤原史行・山本かえ子

発 行 神戸YWCA 夜回り準備会（仮）

【神戸YWCA 本館】 〒651-0093 神戸市中央区二宮町1-12-10

TEL：078-231-6201 FAX：078-231-6692

【神戸YWCA 分室】 〒651-0063 神戸市中央区坂口通5-2-16 神戸YWCA 分室

TEL&FAX：078-221-5111

【E-mail】 yomawari@kobe.ywca.or.jp 【URL】 <http://www.kobe.ywca.or.jp/NOJUKU/nojuku.html>

【郵便振替】 01100-0-10298 名義：神戸基督教女子青年会

【銀行口座】 三井住友銀行 三宮支店（普）1015232 名義：（財）神戸YWCA

※夜回り準備会へのご寄付は、郵便振替用紙にその旨明記するか、上記連絡先までご連絡ください。

《参加者募集しています！》夜回りや病院訪問などに参加したいという方は、上の連絡先までご連絡ください。